

Cluverius の *Introductionis in universam geographiam, tam veterem quam novam*

—— 第2巻第8章～第3巻第8章の翻訳 ——

立岡 裕 士

(キーワード: Cluverius, 地理学史, ヨーロッパ, 17C)

例言

- ①本稿は Cluverius の *Introductionis in universam geographiam, tam veterem, quam novam* の翻訳の一部であり、前稿 (立岡, 2021a) に続いて、第2巻第8章～第3巻第6章を訳したものである。初め、前稿と、同書の新大陸の部分の訳した立岡 (2021b) とによって、Cluverius の地理書の大要を示すことができると考えた。しかしその後、考えを変えて全訳によって紹介することとした。第3巻第7章以下は今後発表したい。続稿としては異例であるが、編集委員会の指示により立岡 (2021a) に記載した例言の内容を重複をいわず記載する。
- ②翻訳に利用したのは Internet Archive (<https://archive.org/>) で提供されている、philippicluverii00clve_4.pdf である。適宜 philippicluverii00clve_2.pdf も参照した。philippicluverii00clve_4.pdf (その第6巻) は1629年の刊行であり philippicluverii00clve_2.pdf (その第6巻) は1641年の刊行である。Cluverius のこの著作は彼の死後に増補されつつ刊行されているが、この両版は (翻訳箇所本文については) ほほ同一内容である (philippicluverii00clve_4.pdf は PDF 化される際にページのノドの部分が削られてしまっている箇所がある。それらを補うためにも philippicluverii00clve_2.pdf を利用した)。
- ③ Cluverius はたとえば Martin (2005) でも言及されるなど、現在でも全く忘却された地理学者ではない。しかし本書は、管見の限りでは Kish (1978) が第1巻第1章および第6巻第12章を (おそらく仏語版から) 訳出しているにすぎない。訳者は本書を、ヨーロッパに地理学が導入された最初期の作品の一つとして取り上げた (この点は別稿を準備中である。本稿末尾の付言を参照されたい)。
- ④ () は原書中で僅かに使用されている。訳者は訳文の都合上、原書にない場合でも使用した。
- ⑤ [] は訳注である。原語を示したり簡単な説明を加えたほか、Cluverius の記事で先行文献が明示的に言及されている場合に当該文献の関係位置を示すのに用いた。これは以下の文献である (() 内は訳者が参照した版。『ゲルマニア』については本稿では参照する訳書を変更した) :

- ・ Apuleius: *De mundo* (Tusculum)
- ・ Caesar: *Commentarii de Bello Gallico* (Loeb および国原吉之助訳 (1994) 『ガリア戦記』講談社)
- ・ Cassius Dio: *Romaike Historia* (Loeb)
- ・ Diodorus: *Bibliotheke* (Loeb および飯尾都人訳 (1999) 『ディオドロス「神代地誌」』龍溪書舎, 9～469)
- ・ Florus: *Epitome* (Loeb)
- ・ Jordanes: *Getica*. the Latin Library (<https://www.thelatinlibrary.com/index.html>) 所収の <https://www.thelatinlibrary.com/iordanes1.html> (IORDANIS DE ORIGINE ACTIBUSQUE GETARUM)
- ・ Lucanos: *Pharsalia* (Loeb および大西英文訳 (2012) 『内乱』岩波書店)
- ・ Mela: *Chorographie* (Bude および飯尾都人訳 (1999) 『ディオドロス「神代地誌」』龍溪書舎, 471～570)
- ・ Plinius: *Naturalis historia* (Loeb および中野定雄訳 (1986) 『プリニウス博物誌 I』雄山閣)
- ・ Silius: *Punika* (Loeb)
- ・ Strabon: *Geographika* (Vandenhoeck および飯尾都人訳 (1994) 『ギリシア・ローマ世界地誌』龍溪書舎)
- ・ Tacitus: *Germania* (Loeb および泉井久之助訳 (1979) 『ゲルマニア』岩波書店)
- ・ Tacitus: *Agricola* (Loeb および国原吉之助訳 (1996) 『ゲルマニア アグリコラ』筑摩書房)
- ・ Tacitus: *Annales* (Loeb および国原吉之助訳 (1981) 『年代記』筑摩書房)
- ・ Tacitus: *Germania* (Loeb および国原吉之助訳 (1996) 『ゲルマニア アグリコラ』筑摩書房)
- ・ Zosimus: *New History* (Ridley, R. T. (1982): *Zosimus*. Australian Assoc. for Byzantine Studies, Dpt. of Greek,

Univ.of Sydney)

- ・ アリストテレス「気象論」(泉治典訳(1969)『アリストテレス全集5』岩波書店, 1~227)
- ・ ウェレイユス(西田卓生・高橋宏幸訳(2012)『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会)
- ・ オウィディウス「黒海からの手紙」(木村健治訳(1998)『悲しみの歌／黒海からの手紙』京都大学学術出版会)
- ・ トログス・ユスティヌス(合阪學訳(1998)『地中海世界史』京都大学学術出版会)
- ・ プトレマイオス(中務哲郎訳(1986)『プトレマイオス地理学』東海大学出版会)
- ・ プラトン(岸見一郎訳(2015)『ティマイオス／クリティアス』白沢社)
- ・ ヘロドトス(松平千秋訳(1971)『歴史』岩波書店)
- ・ ヨセフス(秦剛平訳(1999)『ユダヤ古代誌』筑摩書房)

⑥ **Cluverius** が他者の文献を利用する場合、以下の四つの形式がとられている。

- (1) 文献(著者)名を明示するとともに、原文をそのまま引用し、該当箇所をイタリックとしている場合。
- (2) 文献(著者)名を明示し、引用部分をイタリックとしているが、原文そのままではなく、単語は同一ながら利用する文章にあわせて文法的に改変(主格を対格とするなど)する場合。いわば間接引用文である。
- (3) 文献(著者)名を挙げ、若干の単語は原文のものを利用するが、基本的には単なる言及である場合。
- (4) 文献(著者)名を挙げることなく、典拠文献の文章をそのまま地の文として利用する場合。

本訳稿では、(1)(2)はイタリック部分を「」で示すことで引用であることを示した。(1)は邦訳書がある場合は利用した。(2)(4)については訳文の都合上、邦訳書を利用していない。(4)については、下線を引いてその箇所を示し、また典拠の該当箇所を示した(言うまでもなく(4)であることを訳者が認識できた限りである)。(1)(2)の場合でも **Cluverius** は引用の出所を細かく指示することはほとんどない。本訳稿では(3)(4)の場合も含めて訳注としてそれらを補った。指示方法は、訳者が利用した版でのページ番号ではなく、各文献固有の巻・章・節などを小数点で繋いで表示した(**Plinius** では **Loeb** 版の節番号を用いた)。

⑦ 固有名詞(地名・人名)は原書(すなわちラテン語化表記)のままとし、原則としてカナ表記の煩を避けてローマ字のままとした。ただしノアの子孫については、**Cluverius** の文章からは主格を知ることができなかったため日本聖書協会(2018)の表記によってカタカナ書きとした。その他にも一部の固有名詞をカタカナで表記した。

⑧ 第2巻第5章のイベリア諸王国の歴史を初め、記載された歴史事象について疑念のある箇所は少なくない。しかし事実的な内容については本訳稿の主たる関心ではないため検討していない。

⑨ 距離の測度については本書第1巻第9章で説明されている。本訳稿では **passum** (≒1.5m) を「歩」と訳し、**millia passum** を「千歩」、**milliaria** を「M」と表示する。ただし **Germanica milliaria** は「GM」、**Germanica milliaria communa** は「GMC」と略記する(本訳稿では原文における **communa** の有無にしたがって表記し分けたが、本書では **GM** と **GMC** とは同義に使われていると思われる)。なお、本書第1巻第9章で距離の測度が国によって相違するゆえに1 **milliaria** の長さが異なることを論じ、かつ **Germanica milliaria(communa)** という表記を用いる箇所があるにもかかわらず、そうした形容詞なしで **milliaria** とだけ表記している場合も多い。

第2巻

第8章 Gallia について

Hispania の隣は **Gallia** である。これは初めは、東は **Rhenus** 川・**Alpis** の一部・**Varo** 川によって、南は内海・**Pyreneum** 山脈によって、西は **Gallicus** 洋によって、北は **Britannicus** 洋によって、囲まれていた。**Gallia** のうち **Alpis** を越えた一部が **Italia** のほぼ半分を占領して以降、**Gallia** の名前はここまで拡大された。この地の空間全体は二つに分けられる。一つは **Gallia Cisalpina** で、**Italica** と **Citerior** ともいう。もう一つは **Transalpina** で、**Vltior** であり、今日厳密に言うところの **Gallia** である。またこの同じ地は、身体の特徴によって名づけられた、三つの部族に分けられている。すなわち、**Cisalpina** は **Togata** [=市民服の]、**Roma** の属州は **Braccata** [=半ズボンの]

(*Narbonensis* とも), *Gallia* の残りの部分は *Comata* [=長髪の], である。しかしながら *Cisalpina* については、後に *Italia* が話題になる時に論ずる。いまは *Transalpina* について、その母体について、まず語らねばならない。

さて *Pyreneum* 山脈を超えれば、隣の *Gallia* の地が望まれる。非常に肥沃な土地のゆえに富み、多大な産出のゆえに快適である。所によってブドウやオリーブが植えられる。動物の利用に関する全てにとって多産であるためすこぶる恵まれている。水利については河川・泉の湿潤があり、獣害は稀である。穀物まで多産であるためにより広い *Europa* の地へ運ぶことができるほどである。この地がもっていたかもしれない初めの固有独自の名称を明らかにすることはそれほど容易ではない。後に明らかにされるように、*Roma* を支配した *Tarquinius Priscus* によって、要するに *Gallia* の住民にちなんで *Gallia* という名称が付けられた。その長さは大洋に突出する *Pyreneum* 山地から *Rhenus* の *Vahalus* までさまざまで、*Schenckii* (俗に *Schenckenshans*) 要塞付近まで延びている。幅は *Britannia* の最果ての *Gobaeo* (いま俗に *le Four*) 岬から *Varus* 付近の川までである。この地の広がりの中に *Gallia* は位置していた。上述のように、二つの名前前で区別されている。*Baraccata* は内海に接する。*Comata* は大洋と *Germania* 人とに面している。

第9章 *Gallia Braccata* (属州 *Narbonensis* とも) について

Gallia の内海に面する部分は属州 *Narbonensis* すなわち *Gallia Narbonensis* と呼ばれる。以前は *Braccata* と言われた。*Var* 川・*Alpium* 山脈によって *Italia* から区切られている。*Hispania* からは *Pyreneum* 山地によって、他の *Gallia* からは *Garumna* 川・*Gebenna* 山地・*Rhodanus* 川によって、区切られる。かつて農地の耕作において、人々・習慣の評判において、声望の盛大さにおいて、*Roma* 帝国の属州のうちのいづこにも後れをとるものではなかった。しかし、より正しくは属州というよりも *Italia* である[*Plinius*, 3.4.31]。のみならず今や農業生産、市民の富、建築物の輝き、においてさえ他の *Gallia* よりも華やかである。現在、*Languadocum*・*Sabaudia*・*Delfinatus*・*Provincia* (これは昔の名称の記憶を保つ) を包含する。かつて有名であったその住民は以下の通りである：*Sabaudia* では *Allobroges* (その *Geneva*・*Vienna*)・*Centrones* (その *Axima* (いま *Centron*)・*Tarantasia* (いま *Monstier*・*Tarantaise*)), *Delfinatu* では *Segalauni* (その *Valentia*)・*Vocontii* (その *Dea* (いま *Die*))・*Caturiges* (その *Caturigomagus* (俗に *Chorges*)), *Provincia* では *Gavares* (その *Avenio* (いま *Avignon*))・*Salyes* (その *Aquae Sextiae* (いま *Aix*)), *Languadocum* では *Gabali* (いま *Vallay*)・*Ruteni* (いま *Rodes*)・*Helvii* (いま *Albigois*)・*Volcae Tectosages* (*Tolosa* 近傍)・*Volcae Arecomici* (その *Nemausus* (いま *Nismes*))。これらの住民のうち最も有名なのは *Allobroges* である。かつて都市のうちで最も豊かであったのは *Vasio* (いま *Vaison*)・*Vienna*・*Avenio*・*Nemausus*・*Tolosa*・*Arausio* (いま *Orange*)・*Arelate* (いま *Arles*)・*Blitterae* (いま *Bezies*) である。しかし *Provincia* の名前・声望の全てに、*Martius Narbo* (いま俗に *Narbonne*) は勝っていた。一方、海港では *Graecia* 人に建てられた極めて古い町である *Massilia* (俗に *Marseille*) が有名である。今でもこの町は全 *Provincia* 中で最も有名である。

第10章 *Gallia Comata* およびその第一の部分 *Aquitania* について

Gallia Comata は三つの部分に分けられていた。*Aquitania*・*Celtica*・*Belgica* である。しかしこれについて、それぞれの者がそれぞれの境界を設定した。*Caesar*[1.1]は、*Belgica* を *Rhenus*・大洋・*Sequana* 川・*Matrona* 川の間とし、*Celtica* を *Belgica* よりも本来の *Gallia* としかつその住人をどこでも *Gallia* 人と呼んでいる。『ガリア戦記』[1.1]は、*Celtica* について、*Matrona* 川・*Sequana* 川・大洋・*Garumna* 川・*Gebenna* 山¹⁾・*Rhodanus* 川・*Rhenus* 川の間とし、*Aquitania* を *Garumna*・大洋・*Pyreneus* 山地の間とする。その後 *Augustus* は別様に区分した。すなわち、*Belgica* を *Rhenus* 川・*Rhodanus* 川・*Arar* 川・*Matrona* 川・*Sequana* 川・大洋の間に、*Celtica* (首邑の *Lugdunum* にちなんで *Lugdunensis* と呼ばれる) を *Matrona* 川・*Sequana* 川・*Liger* 川・大洋の間に、*Aquitania* を *Liger*・*Gebenna*・*Pyreneum* 山地・大洋の間に、設定した。昔の *Aquitania* すなわち *Caesariana* は以前は *Aremorica* と言われ[*Plinius* 4.105], 今は *Vasconia* (俗に *Gvascogne*) と呼ばれる。*Vascones* が、かつて *Pyreneum* の間道によって *Hispania* からここまで越えたことはほとんど疑えない。かつて有名であった人民は、*Ausci* (いま *Armignac* 地方), *Vasates* (いま *Albret* 地方, *Bazas* の街), *Begerri* すなわち *Bigerriones* (いま *Bigorre*), *Tarbelli* (その街は *Aquae Tarbellae* (いま *Acqs*)) である。これらのうち最も有名だったのは *Ausci* である。そしてその首邑 *Elusaberis* (いま *Aux*) は、昔の全 *Aquitania* で最も豊かであった。

その他の Aquitania において、今日の州名に起源を与えた尊敬されるべき人民は、Cadurci (*Quercii*。その街は Devona (*Cahors*)・Petricorii (いま *Perigort*。その Vesonna (いま *Perigueux*)・Arverni ないしは Alverni (いま *Aubergne*。その Augustonemetum (いま *S.Flour*)・Limovices (いま *Limosin*。その Augustoritum (*Limoges*)・Bituriges (いま *Berrij*。その Avaricum (*Bourges*)・Pictones (いま *Poictou*。その Limonum (いま *Poictiers*)・Santones (いま *Sainctonge*。その Mediolanum (いま *Sainctes*)) である。

第11章 Gallia Celtica すなわち Lugdunensis について

Celtica でかつて有名であり今日でも幾分かは名前が知られている人民は：Osismii (いま海に突出している [Plinius 4.107] Britannia の末端である。その街 Vorganium (いま俗に *Guinguand*)・Veneti (その Vindana (いま *Vannes*)・Nannetes (その Condivincum (いま *Nantes*)・Curiosolites (下 Britannia)・Redones (上 Britannia。その街 Condate (いま *Redon*)・Andegavi (Andecavi・Andes ともいう。いま *Anjou*。その街 Iuliomagus (いま *Angiers*)・Turonos (いま *Tourraine*。その Caesarodunum (いま *Tours*)・Aulerci Diablintae (その街 Noviodunum (いま *Maine*)・Aulerci Cenomani (その街 Vidunum (いま *Mans*)・Venelli (その Crociatonnum (いま *Quarentain*)・Carnutes (その Autricum (いま *Chartres*)・Gennabum (いま *Orleans*。まさにその地方が *la Beausse*)・Lexobii (その Noviomagus (いま *Lisieux*) は Normandia にある)・Aulerci Ebuobices (その Mediolanum (いま *Evreux*) は Normandia にある)・Parisii (その Lutetia (いまの *Paris*)・Senones (その Agendicum (いま *Sens*) は Campania にある)・Tricassii (その Augustobona (いま *Troyes*) は Campania にある)・Aedui すなわち Hedui (その Augustodunum (いま *Austun*) は Burgundia 伯領にある)・Vadicasses (その Noviomagus (いま *Nyys*) は同伯領にある)・Segusiani (いま *Forest*。その街 Forum Seguisianorum (いま *Fours*)・Lugdunum (同様にそれ自身の領土 Lugdunum (いまの *Lyon*) にある)。これら全ての中で最も有名なのは Hedui、かの Celtica 全ての街の中で最も豊かなのは Augustodunum である。Lugdunum は属州に名前を与えた。

第12章 Gallia Belgica さらに Gallia Transalpina の全河川 について

かの古代の Belgica は Gallia Comata の第三の部分であり、最古の記者たちによれば、Rhenus 川・Rhodanus 川・Lemannus 湖・Matrona 川・Sequana 川・Britannicus 洋によって囲まれている。そして Helvetii から大洋まで Rhenus の内陸の岸すべてに Germania の人間が棲みついていると、Plinius[4.17.106]と Tacitus[*Germania*, 29~32]とが伝えている。今日も確かに同様で、しかも昔よりも多少とも広いであろう。したがって Plinius[4.17.105] は Belgica の始まりを Scaldis 川からとしている。Mosa・Francia の間、大洋までが Taxandri であった。今の Zelandia と Brabantia の低地部とである。そして Brabantia の残部が Menapii である。同様に、Rhenus までの一帯が Geldriae である。Mosa 河岸にあるその街 Casellum Menapiorum は今の *Kessel* である。Morini は, Flandria の、大洋と Legia 川との間の部分である。その街 Teruanna は今の *Tervvnanedearu* で、Gessoriacus 港は昔の Itius であり、その後まもなく Bononia となり今は *Boulogne* である。Ambiani (その街 Somanobriga (いま *Amiens*))。Bellovaci (その Belgium 地方はいま *Beauvoisin*。その街 Caesaromagus (いま *Beauvais*))。Caletes (*Pais des Cauls*。その街 Iuliobona (いま *Diepe*))。Vellocassii (その街 Rotomagus (いま *Roan*))。Atrebatas (その街 Nemetacum (いま *Arras*))。Nervii (その街 Bagacum (いま *Bavay*), 同じく Cameracum (いま *Cambary*))。Eburones・Condrusi・Segni・Caeraesi・Poemani は、もとは一つの名前で、Gallia 人からは Germani と、その後彼ら自身からは Tungri、と呼ばれていた。その街 Atuatuca はいま *Tongeren* である。Veromandui (その Augusta Veromanduorum (いま *Vermandois*) は Picardis 最果ての小村である)。Suessiones (その Augusta Suessionum (いま *Soissons*))。Silvanectae (その Ausustomagus (いま *Senlis*))。Remi (その Durocortorum (いま *Reims*) は Campania にある)。Treviri (その Augusta Trevirorum (いま *Trier* (Germaia 語) もしくは *Treves* (Gallia 語))。Mediomatrices (その Divodurum (いま *Metz*))。Leuci (その街 Tullium・Nasium (いま *Toul・Nansy*) は Lotharingia にある)。Lingones (その Andomatunum (いま *Langres*))。Sequani (その Vesontio (いま *Besançon*) は Burgundia 伯領にある)。Rauraci (いま Basileensis 領、その街 Augusta Rauracorum (いま *August* 村))。ここから Helvetii で四つの地方区[Pagus]に分けられている。それらの地方区の名称は、Tigurinus・Tugenus・Ambronicus・Vrbigenus である。Tigurinus の名は太古の街 Tiguro (より正しくは Turigo と書かれる。今の *Zürich*) に由来する。Tugenus は Tugio (今の *Zug*) の街に由来する。Ambrones の名は、近くを流れる Amma (今の *Emme*) 川

に由来する。Vrbigeni は Vrba (今の *Orbe*) の街に因んで言われる。

Helvetii の首邑は Aventicum (Gallia 語で *Avances*, Germania 語で *Wiflisburg*) であった。一方、同じ属州で Rhenus 近くに居住する Germania 民族には : Elsatia の Trebocci (その Argentoratum (今の *Straesbourg*)) ・ Nemetes (その Noviomagus (今の *Speir*)) ・ Vangiones (その Moguntiacum (今の *Mentz*)) ・ Vbii (その Colonia Agrippinensis (今の *Collen*)) ・ Iugerni (Gelria ・ Clivia の一部にある。その街 *Goch* ・ *Gelre*。かつて Rhenus を越えて居住したので Sicambri と呼ばれる)。ここから Batavi で、Rhenus の Insula に住んでいる。Gelria の一部、Trajectensis 州の一部、さらに Hollandia の一部を占める。Rhenus が角のように二つに分かれるところにある Schenkii 要塞 (俗に *Schenkenschans*) から遠からぬ Clivis の街に始まる。左の流れは Vahalis 川と呼ばれる。Vorconum の街の近くで Mosa 川と合流し、Mosa 河口と呼ばれるところへ、大洋に向かう一つの水流として流される。右の流れは、初め Batavodurum (俗に *Wijck te Duerstede*) までは幅が広いが、ついで Trajectus というそれ自身の名前をもつほどほどの水路となり、Lugdunum の街を貫通し、かつては *Catvuijc* 村の付近で大洋に注いでいたが、今その河口は砂で塞がれている。要するに、この二つの水路ならびに大洋によって囲まれているところはどこも Batavi 島であった。この名前は今日でもその上流部では保たれており、俗に *de Betauvv* と言う。Batavi 島の外でも Vahalis ・ Mosa 川に囲まれているところはどこでも Batavi が占居した。島の Trajectum ・ Worda に近い部分には Caninefates が住んでいた。その他の点に関して、Gallia 人全てのなかで最も強かったのは Belgae 人であり [Caesar, 1.1], 最も好戦的なのは Helvetii, 高名なのは Treviri である。Belgica の街のなかで最も富裕なのは Augusta Trevirorum である。

Gallia の諸河川

Gallia の川のなかでより有名なのは、大洋に流れていく Mosa (俗に Germania 語では *die Mase*, Gallia 語では *la Meuse*) ・ Scaldis (Gallia 語では *l'Escaut*, Germania 語では *die Schelde*) ・ Sequana (*la Seine*)。Matrona (俗に *le Marne*) が流れ込む) ・ Ligeris (*la Loire*) ・ Garumna (*la Garonne*) である。Rhodanus (Germania 語では *der Roden*, Gallia 語では *le Rosne*) は Europa の三大河川のなかで比べると最も急流で、最も緩やかな Arar (俗に *le Saone*) は内海に流れ込む。

第13章 Gallia の住民 およびその後世の区分について

かつて Celtae という名前で一つの部族が Hispania ・ Gallia ・ Germania ・ Illyricum ・ Britannica 島全域に住んでいたということは先に Hispania のところで述べた [第2巻第5章]。そして後に Germania 誌においてさらに詳しく述べる。もっとも、Gallia の民は実に数が多く、故国では不毛な土地を持っていたわけではなかったものの、多数の人間のために、長期にわたりさまざまな世界の諸地方を植民地とする必要があった。彼らのうちの一部は Italia の約半分を占居した。ある者は、ここから、さらに進んで Asia にまで到達した。そしてそこで、Galatia すなわち Gallograecia もしくは Graecogallia の名称を作り出した。他の者は Britannia 島に到ったと考えられている。一方 Germania では別の者が Rhenus から Vistula 源流までの広大な空間を占めた。Gallia 本体では全部族が暮らしていた。それぞれの部族がそれぞれの名称によって政府 ・ 政務官に識別された。初めに Salyes が Roma 軍を知った。彼らの侵攻について Roma の同盟市である Massalia が嘆いた時のことである。次が Allobroges ・ Arverni で、Hedui の同様の行為に対する助力と援助とを哀訴した時である。第一に従属した Narbonensis Gallia は属州にされ、Domitius Aenobarbus ・ Fabius Maximus がそこに勝利碑を建てた [Florus 1.37]。残余の Gallia については10年間、支配の荣誉が Iulius Caesar に委ねられた。この後、全域が、Honorius 帝の動乱に至るまで、行政官のもと Roma の支配に服した。AD400年頃、Hispania ・ Italia を荒略した Gothi の一部が Narbonensis 属州を侵し、さらに彼らに由来する地方の名称を押し付けた。これは後世訛って Languedoc, すなわち *langue de Goth*, と呼ばれる。その後帝国領内で Liger 川まで動かされて王国は定礎され、その首邑および王宮は Tolosa であった。同じ動乱により、Burgundiones は、最遠の Germania (いまは Cassubii ・ Brandenburgensium の一部がその場所を占める) から、Vandal ・ Suevii によって前に進められた時に、Germania の他の部分を占居した。王国を建て、自分たちにちなむ Burunduia の名を押し付けた。その首邑と王宮とは Arelate である。Burgundia ・ Lugdunensia 双方の領地および Delfinatus ・ Sbaudia ・ Provincia を含んだ。ほぼ同じ頃に Franci Germanica 種族が、Rhenus を渡り、Gallia の最近隣の部分である Tungria (今の Brabantia および Leodiensis 司教領) を占居し

た。すぐに Gothi に攻撃され、ほどなく退却した。その後 Parisius まで進出し、まさにその地に王国を創り、自分たちにちなんで Francia の名称を押し付けた。その首邑・王宮は Lutetia である。およそ同じ頃、Britanni が Anglii・Saxones のために Britannia 島を追われた (Anglii・Saxones は Britanni が、Scoti・Picti に対する助力として Germania から招いたのであったが)。彼らは Gallia Celtica の辺境を占居し、彼らの名前にちなんで Britannia minor と呼んだ。そして Francia 王 Clodoveus V 世は Burgundia 王 Gundebaldus に武力で征服され、Gothi は Gallia から追い出され、両王権は Burgundia 王に帰した。彼が死ぬと、王権は、Francia IV の子どもたちに、四つの部分すなわち王国に分かれて残された。第一は Parisii 王である。Parisii (いま俗に *Isle de France* すなわち *Insula Franciae*)・Campania・Cenomani・Turones・Andegavi・Aquitani・Arverni が従属した。第二は Suessii 王である。その王国に、Veromandui・Neustrii (今の Normanni)・Picardi・Flandri が屈服させられた。第三は Burgundia すなわち Aurelianus 王である。彼には、かつて Burgundia 王国と言われたもの全てと、Aurelianensis 公領とが服した。第四は Metensis すなわち Austrasia 王である。Mosa・Rhenus 間の全てを包含する。しかし兄弟たちが死んだために、Clotarius が単独で財産を手に入れた。同様に彼の 4 人の子によって、王国は再び前述の四つの部分に分割された。そして以前のように兄弟が死去したため Clotarius II が全 Francia 王国を独りで手にした。王国は、Carolus Magnus の動乱まで、彼の後継者たちに完全無欠に維持された。その動乱の際に、Austrasia は分離され、Flandria さえその統治権が犯された。ついで皇帝 Henricus III は Burgundia 王国を Germania 帝国に併合した。しかしその後、それは 4 部分に分割された。Saxonia 公 Beroaldus は Sabaudia を侵略した。Flandria 伯 Otho は一部を占領し、それを *Franche Conte* すなわち Burgundia 自由伯領と名づけた。Guigius 伯はそれを、子どもの義父の名前によって Delfinatum と呼んだ。Boso は最後に Provincia 王国において Arelatense と呼ばれるところを保持した。そして後代の Francia 王たちは Provincia および Burgundia 公領を再び手に入れた。その最後の元首 Hubertus は、Delfinatum を Gallia 王に売り、今後その王の長子が Delphinus の名前を身につけるように約条を定めた。Sabaudia は Beroaldus の後継者が今なお保持している。Burgundia 伯は同じ称号・権利によって、Hispania さらに Flandria 自体までの王権を手に入れた。Avenionensis 伯領は Ioanna Provincia 伯が教皇 Clementus VI に譲り、今なお Roma 教会の支配の下にある。

第14章 より最近の Gallia およびそれが諸州に区分されていることについて

このような次第で、かつてあったよりも狭小な Gallia (事実上、全 Belgica が奪われた) が生まれた。したがって、南・西・北においては昔の境界が保たれているが、東は Sabaudia・Burgundia Comitatus・Lotharingia・下 Germania (いま俗に Belgica とともに Belgium と呼ばれる) に囲まれている。その長さは、Britannia 末端から Italia の末端である Varus 川まで 180GM に亘る。幅は Bearnia の Pyrenaeus 山脈から Picardia まで 140M である。そして、この地に進出した Germania の種族である Francii にちなんで俗に Francia と呼ばれる。さまざまの地方に分割されながら全体は一人の王に従属する。主要な地方の俗称は次の通りである：*Bretaigne・Normandie・Picardie・Champagne・la France・Beausse・Berry・Blaisois・le Maine・Touraine・Anjou・Poicntou・Saintonge・Perigort・Limosin・Bourbonnois・Bourgogne Duché・Quercy・Guascogne・Languedoc・Provence・Dauphine*。かくして、かつての La Bresse は Sabaudia の一部であって全く与らず、Mets・Toul でさえ最近になって Francia 王によって Lotharingia の街とされた。Gallia における残りの公領は 19 である：*Orleans・Bourgogne・Narbonne・Bretagne・Anjou・Berry・Normandie・Auvergne・Gujenne・Tours・Barleduc・Valois・Nemours・Alencon・Reims・Laon・Langres・Bourbon・le Maine*。かつて Carolus Magnus は Francia の諸地方を 12 に編成した。そのうちの 6 が教会領、6 が世俗領であった。教会領のうち公領 3 (Remensis 大司教領 (俗に *Reims*)・Laudunensis 司教領 (俗に *Laon*)・Lingonensis 司教領 (俗に *Langres*)、伯領にして司教領 3 (Catalaunensis (俗に *Chalons*)・Noviodunensis (俗に *Noyon*)・Bellovacensis (俗に *Beauvais*) である。同様に世俗領でも公領 3 (Burgundicus・Normannicus・Aquitanicus (俗に *Guienne*))、伯領 3 (Flander・Tolosanus・Campanus) である。今日ではこの 12 のうち二つ、Burgundicus・Flander は廃されている。conventus juridici [裁判管轄区] (Franci は parlamenta と呼ぶ) は 8：Normannia の Parisiensis・Rotomagensis (俗に *Rouan*)、Britannia の Redonensis (俗に *Renes*)、Burgundia の Divionensis (俗に *Dijon*)、Vasconia の Burdegalensis (俗に *Bordeaux*)、Linguadocum の Tolosanus (俗に *Toulouse*)、Delfinatu の Gratianopolitanus (俗に *Grenoble*)、Provincia の Aquensis (俗に *Aix*)。近年、これにさらに二つの裁判管轄区が加わった。Bearnia の *Pau* と、Lotharingia の *Mets* とである。大司教領は、Francia 全体を通して 15、それに従属する司教領は 103 である。

第15章 Gallia の有名な都市ならびに高名な学園について

最も有名な Gallia の街は、Parisii すなわち Insula Franciae にある、王国の首邑・王都 Lutetia Parisiorum (俗に *Paris*) である。Europa の全ての街のうち、Constantinopolis を除けば第一で、宏大さ、住民の周密さ、令名高いこと、その偉観、といった点で最大限に評価されるべきである。Picardi では Ambianum (俗に *Amiens*。寺院内部の壮麗さおよび装飾の際立つ)。Normannis では Rotomagus (*Rouan*。Britannicum 洋に面する Gallia で最も豊かな商業地)・Cadomum (*Caen*)・Diepa (港町としてきわめて名高い)。Britanni では *Renes*・*Nantes* (極めて有名な商業地)。Andegavum では Andegavum すなわち Iuliomagus (俗に *Angiers*)。Turonibus では Toronum (俗に *Tours*)。Belsensi 州では Belsense 要塞 (俗に *Blois*。その領地は、多様な快適さの故に、Gallia の公園と呼ばれる)。Beausse では *Chartres*・*Auerelianum* (俗に *Orleans*)。Biturigi では *Bourges* (古代の名残と Xenodochius とで有名である)。Campania では Remi (俗に *Reims*。外面が精巧な建てられた寺院建築でよく知られている)・Catolauni (俗に *Chalons*)・Tricassium (俗に *Troyes*。殷賑かつ人の多い都市)。Burgundia では Divionum (俗に *Dyon*。かつて公領の首邑であった)・Cabilonum (俗に *Chalon*。決して無視できない商業地)・Matiscona (俗に *Mascon*。すこぶる目立つ)・Belna (俗に *Beaune*。Xenodochius の崇高さで知られる)・Augustodunum (*Autun*。Roma の古物が充満し、Gallia の Roma と呼ぶ人があるという)。Borbonensi 州では *Molins*。Lemovicum では Lemovicum (俗に *Limoges*。富裕な商業地)。Pictones では Pictavium (俗に *Poitiers*。大きさの点で確かに Lutetia に劣り、人口もはるかに少ない)。Santones では *Saintes*。Roma の古物で大いに装飾されている)・Rupellae (俗に *La Rochelle*。Aquitanicum 洋に面した最も有名な商業地。はなはだ難攻不落な都市にして、最近の内乱においてプロテスタントにとって最も安全な要塞)。Vascones では Burdegala (俗に *Bordeaux*。大都市。古代 Roma の遺物で目を魅く。はなはだ豪華な商業地。Garumna 川によって舟運の便がある)。Linguadocia では Tolosa (*Toulouse*。住民の多いことで際立つ)・Martius Narbo (俗に *Narbonne*。かつて壮大な都市、今は防備ではなはだ有名)・Mons Pessulanus (俗に *Montpellier*。大きくかつ華麗な都市)・Nemausus (俗に *Nismes*。Gallia 全体の中で、最も古代 Roma の遺物にあふれている)。Provincia では Massilia (*Marseille*。便利さと優美さとで有名な港。内海に面した Gallia で最も富裕な商業地)・Triremium (王宮の滞留地で、Arelate とともに自由市。どちらも Gallia 王の庇護下にある)・Aquae Sextiae (俗に *Aix*。美しい都市である)・Avenio (*Avignon*。Roma の教会に服従)。

学園

高名な Gallia の学園は、Lutetia Parisiorum・Cadomum・Andegavum・Aurelianum・Biturigium・Pictavium・Burdegala・Tolosa・Mons^{ママ}pessulanus のものである。

第16章 Sabaudia・Burgundia 伯領について

ここまで、今日 Francia 王に服従している地方について詳述した。古代の Belgica のほぼ全域を占める、残余の Gallia について、Narbonensis 属州の一部とともに説明せねばならない。昔の Gallia から削られたこの部分は全体として五つの統治権に分割されている。第一は、Sabaudicus という家名を、自身の所領 Sabaudia から承けた公が把持する。Sabaudia 戦争の際に自由都市でありプロテスタントの信仰を表明していることで評判の、Geneva を除いては、有名なものは何もない。巡回裁判区は Cameriaci (俗に *Chamberij*) である。Mauriana 谷の Fanum Divi Ioannis (俗に *S. Jean de Morienne*) は優れた要塞で喧伝されている。第二の支配権は、Burgundia 伯領における Hispania 王のものである。そこでは Vesontio (俗に *Besancon*) が、卓越した都市で、王命に忠実な自由都市である。そして Dola (*Dole*) は巡回裁判所と学校とで有名である。第三の支配権は Germania 皇帝のものである。その下に、Alsatia・Lotharingia・Treverensis・Leodiacensis 司教領・Iuliacensis 公領、そして Clivensis 公領の一部、がある。これらについては Germania において取り上げる。第四の支配権は Helvetii・Valesii のものである。五つ目の下 Germania は、俗に呼ばれているように、Belgarum である。最後の二つについて論じなければならない。まずは Helvetii について。

第17章 Helvetii・Valesii について

Helvetii の全体は自然によってあらゆる面で安全に囲まれている。一部は Rhenus 川によって Germania から分けられている。別の部分では極めて高い Jura 山によって Gallia から離されている。さらに別の部分は Lemanus 湖によって Sabaudia から区画される。かつては Tigurinus・Tugenus・Ambronicus・Vrbigenus の四つの地区に分けられていたことは、先に古代 Galliae についての記事 [第2巻第12章] のなかで述べた。全ての Cettlica のなかで最も好戦的な民族であったので勇気の点で他の Gallia を凌いでいた。隣り合う Germania 人と毎日のように戦って争っていたからである [Caesar, 1.1]。その自信に頼って、Gallia 全域の支配権を手にしようと試みた。自身の国家を狙っていた Gaius Julius Caesar は武力によってその座を実現した。そして一国を Gallia の残部とともに Roma の支配に服させた。Honorius 帝の騒乱までそれに服従した。その際、さまざまな人々によって帝国のさまざまな部分が奪取された時、Alemanni (Rhenus・Moenus・Danubius の間に場を占めていた) は Helvetia を、そこへ事前に頻りに侵入を繰り返してから、占拠した。そして Gallia のうちの強奪された部分を、Germania は自己の体に加えた。ついで Suizeri 部族 (おそらくかつて首邑であった Svuitz 村にちなんで呼ばれる) が、Germania 帝国のもとでそれを保有した。その公に従属したが、遂には1400年頃、自らの自由のために Leopoldus 公を戦いに斃し自由を主張するにいたった。自由を勝ち取った後に相互の間で批准された同盟によって、彼らはいまや自由に討議し、13の地方 [pagus] すなわち市民共同体 (当今の住民によって Oerter, Gallia 人からは Cantons と呼ばれる) に分けられている。市民共同体は次の通り: Zurich・Bern・Lucern・Vri・Svuitz・Vndervalden・Zug・Glaritz・Basel・Friburg・Soloturn・Schafhausen・Appenzell。これらのうち Appenzell・Glaritz・Svuitz は vicus [村] である。Vndervalden・Vri は地方名で、それらの首邑は二つの vicus である (前者は Stantz, 後者は Alttorf)。残りの 8 canton は urbs [街] である。これらのうち最も強力なのは Berna である。というのも Geneva から Basilea まで 30GM を越えてその権力が延びているからである。Tigrum・Basilea・Lucerna・Friburgum・Solodurum がそれに次いで、有力な市民共同体である。全 canton のなかで宗教においてプロテスタントのものは Bern・Zurich・Basel・Schafhausen である。Roma カトリックのものは Lucern・Friburg・Soloturn・Zug・Vri・Vndervalden・Svuitz である。両方の宗教を宣言しているのは Glaritz・Appenzell である。全 Helvetia の議会は Aquis Helvetiis (俗に Reichsbaden) である。学校は Basilea のものが最も有名である。さらに、Gymnasia (それに匹敵する学校である)・Tirusus・Berna および Bernensium 地区の Lausanna である。さらに Helvetii 地区の同盟都市 S. Galli Fanum はリネン生産で最も名高い。

Vallesii

Vallesii (俗に die VValliser) 邦は、盟約によって結ばれた、Helvetii 連邦の一部である²⁾。彼らはかつて Gallia の人のなかの、Rhodanus 源流から Lemanus 湖 (俗に Gensersee) 谷にいたる Pennina Alpium に住みそして [谷 = vallis によって] その名前がついている、Inalpini の人々であった。谷全体は四つの人民に分かれている。Rhodanus 源流近く Gomers 村周辺には Viberi が住み、Seduni はいま Sedunum 司教座の街 (俗に Germania 語では Sitten, Gallia 語では Sion) の周辺に [住む]。Veragri の村は Octodurus (今の Martinach) である。Nantuates は聖 Mauritius 寺周辺に [住む]。Servius Galba 帝が Gallia 総督であった時に初めて全人民を従えた。今、一つの自由共和体のもとで Germania 人が住んでいる。

第18章 現在の Belgica, すなわち今日の下 Germania について

今日 Belgica と呼んでいるのは、古代の Gallia と Germania との交雑した境域において17州を包含する地である。同じ下 Germania を、土地の言葉で *Niederland*, Italia 語・Hispania 語・Gallia 語では *Flandria* と呼ぶ。17州中かつて最も有名だった一州の名前によっている。この地方は、農地の耕作されていること、市街・農村の多数なること、全 Europa で最も洗練された外観であること、そしてさまざまな商取引・遠洋航海、によってはなはだ豊かである。その境界は、北は Germanicum 洋, 東は Frisia Orientalis・VWestfalia・Coloniensis 領・Iuliacensis 公領・Trevirensis 司教領, 南・西は Gallia 王国, である。Rhenus 川此岸の Gallia にのみある部分にいたはずの人々についてはすでに示した [第2巻第12章]。Rhenus 彼岸の Germania に位置するもう一方の部分では、かつて Frisii が, Rhenus 河口から Amisia 川 (俗に die Ems) の河口まで、北 Hollandia・西 Frisia・Groningen 領・

Trajectensis 州の一部にいた。Bructeri は Transisalana 州にいた。Marsaci は、Rhenus と Isalam 川との間、Amersfort 周辺である。これら全ては Augustus Caesar の支配期に Livius Drusus が従えた。Gallia にいた者は、Julius Caesar が征服した。ついで、Rhenus 此岸の者は、Theodosius の治世に外来部族によって略奪されるまで Roma の支配下に留まった。そしてさまざまな Germania の人々が、ある者はその後すぐに、ある者はここまで移住した。そのうちのある者たちは後に Gallia に、実に少なからざる者たちが Britannia 島にさえ、移住したので、旧地の住民たちは、自分たちのために王を樹て、自分たち自身のために自由を主張した。ついで時が経過し、この地方全体が17州に分かたれた。そのうち、あるものは公の名前により、あるものは伯の、あるものは領主[dominus]の名による、支配者を受け入れた。かくして以下の通りである。公領4：Brabantia・Limburgium・Luceburgium・Gelria。伯領7：Flandria・Artesia・Hannonia・Hollandia・Zelandia・Namurcum・Zutphania。神聖帝国の侯領1：Antverpia。領主領5：Frisia Occidentalis・Mechlinia・Trajectus・Transisalania・Groningium。Frisia は、Roma 帝国の桎梏を振り払った後、約400年間、彼らの王の下にあった。それらが消滅して Carolus Magnus の支配が及んだ。その後、他と同じように、彼ら自身の王によって統治され始めた。そして時が経ち、それぞれの州は支配者たちの結婚によって結合され、遂には一つの領国となった。その初代は Burgundia 公 Carolus (家名は Audax) で、Carolus 5 世帝の高祖父である。Carolus 5 世は [父親の] 死後に相続人となり、息子の Hiapania 王 Philippus にこれを残した。同じ名前の息子がそれを継いだ。

そして住民は Carolus V 世によって彼らに対して暴行・不正がなされ特権 (それによって彼らの自由に十分な保証が担保された) を剥奪されたと判断したので、力を力て排除し武器をもって父祖伝来の自由を守ろうと決断した。かくして、かの40年の長きにわたる戦争となった。一部は Hispania 軍に破れ、一部は以前の自由の状態に自らを解放した。この時から Belgica すなわち下 Germania は二つの部分に分けられた。Hispania の支配に服している州は以下の通りである：Brabantia・Limburgium・Luceburgium、および Gelria の半ば (Rhenus・Vahalem の此岸、古の Belgica に位置するもの)、さらに Flandria・Artesia・Hannonia・Namurcum・Marchionatus・S. Imperil・Mechlinia。残りの州は一つの共和政体のもと一様にかつ堅固に自由を守っている。

第19章 下 Germania の主要都市について

Flandria (俗に *Flandren*)

Flandria はキリスト教世界の全ての伯領を凌駕する。農地は肥沃で牧草地は繁茂する。近くに *Cadsant*・*Ostburgh*・*Bierfliet* の島があり、領民は同盟の一員として [遇される]。Flandria の主要都市は：Gandavum (俗に *Gent*。州の首邑で、Europa の大都市のなかに数えられる。Carolus V 世の誕生地として著名である)・Brugae (*Brugge*。美しさと快適さとの故に首位を主張する)。これらに次ぐのが、Tornacum (Gallia 語で *Tournay*、Germaia 語で *Gornick*)・Cortracum (Gallia 語で *Courtraij*、Germaia 語で *Cortrijck*)・Duacum (*Douay*)・Insulae (Gallia 語で *L'Isle*、Germaia 語で *Ryssel* もしくは *ter Issel*)・Yperae (*Yperen*)・Neoportus (*Nieuport*)・Sluys・*Duynkercke*。海賊が優勢な戦いのゆえに評判が悪い。Ostenda は Hispania の3年間の攻囲のために際立つ。Greveringa は Gallia 国境における要塞のなかで最も有名である。

Artesia (*Artois*)

Artesia の首邑は Atrebatium (俗に Germania 語で *Atrecht*、Gallia 語で *Arras*) で、華麗な街である。ここからは D. Audomarus 寺 (俗に *S. Omer*) が有名である。Tervanna はかつて注目された。Carolus V 世に占領された後、完全に破壊された。この後この伯領は神君 *Paulus* の家名により有名である。

Hannonia (Gallia 語で *Hainaut*、Germaia 語で *Henegouvu*)

Hannonia の首邑は Montes (俗に Gallia 語で *Mons*、Germania 語で *Bergen*) である。それに次ぐのは Valentianae (Gallia 語で *Valenchiennes*) である。Cameracum (Germania 語で *Camerick*、Gallia 語で *Cambray*) はその農地のゆえに傑出した州になっていると見られる。それは *Cambresis* と呼ばれる。

Namurcum (Gallia 語で *Namur*, Germaia 語で *Namen*)

首邑は、州の名を受けて、Namurcum で、建築については、華麗と言うよりも力強い。

Leceburgium (*Lucelburg*)

この公領には、州の名前が由来する Luceburgium を除いては、特色となるものが皆無である。この街は、自然の位置によって難攻不落であるのと同時に忌まわしい。

Limburgium

その首邑は Limburgium である。残りの有名な17州の間で、より小さい。Falcoburgium・Dalem の二つの伯領は Limburgiensis 公領の一部である。

Brabantia (Brabandt)

Brabantia の第一の街は Antverpia (Gallia 語で *Anvers*, 下 Germaia 語で *Antwerpe*, 高 Germaia 語で *Antorf*) である。その市場はかつて全 Europa で最も有名であった。今でも地球上で最も華麗な街である。その要塞のために極めて有名である。Bruxellae (*Brussel*) は壮大な都市で、Hispania 領 Belgia の総督の所在地である。Silva 公の *des Hertogenbosch* および Lovanium (俗に *Leuven*) は著名な都市である。さらに、*Breda*・*Sevenbergen*・*Bergen op Zoom*・*Lier*・*Herentals*・*Diest*・*Tienen*・*Gemblours* は決して些末な街ではない。Mechlinia (Germaia 語で *Mechlen*, Gallia 語で *Malines*) は17州の一つをなし、Belgica の最も優れた州の中に数えられているのは当然である。その他 Brabantia には公領 *Arschot*, 候領 *Bergen op Zoom*, 伯領 *Hoochstraten*・*Mengen*, 男爵領 *Bredae*・*Diest*・*Grimbergen* がある。

Zelandia

Zelandia は若干の島々に分かれている。そのなかでも有名なものは Walachria (俗に *Walcheren*)・Scaldia (俗に *het Landt van Schouwen*)・Bevelandia・Austrina (俗に *Zuyt-Beverlandt*) である。Walachria で第一の都市は Middelburgium で、有名な市場である。次が *Vlissingen* で、Gallia や Britannia から Zelandia にやってきた船が第一に着岸する。Vera (俗に *ter Veer*) は Scotia の商品の市場である。Scaldia 島には、*Sirickzee* がある。十分に著名な町である。Bevelandia には *Gusa* (俗に *ter Goes*) がある。

Hollandia

Hollandia は、世界のさまざまな地方における商業が盛んなために Belgica 全体で最も有名かつ有力である。南北に分かたれている。北 Hollandia の南部は多数の湖によって覆われ、住民によって *Waterlandt* と呼ばれる。威厳の点で Hollandia 全都市のなかで首位にあるのは Dordracum (俗に *Dordrecht* および *Dort*) で、Mosa・Vahales が作りだした、まさに湖のなかで汀に位置する。Rhenus のブドウのしばしば開かれる市のゆえに極めて有名な市場である。そして全てのなかで最大・最有力なのが Amsterodamum (俗に *Amsterdam*) で、Germanicum 洋に面した最も富裕な市場である。Lugdunum Batavorum (俗に *Lyden*) は、Hollandia のみならず Belgica 全体で、快適さ・衛生の点で、最も素晴らしい。Delphi (俗に *Delft*) は、極めて有名な Mauritius 公[princeps]の親 Auriacus 公 Gulielmus の殺害で知られる市民共同体である。Roterodamum (*Rotterdam*) は Erasmus Roterodamus の生地として有名である。Amstelodamum に次ぐ市場である。Haga-Comitis (俗に *des Graven-Haghe*) は全 Europa で最も有名な村であり、多くの都市よりも高く評価されるべきである。かつては Hollandia 伯領であったが、いまは全州同盟会議の所在地である。というのも、共同の業務について決定すべきたびごとに全州がここに集まってくるからである。有名な都市はさらに：*Haerlem*・*Goude*・*Geertrudenberghe*・*Alckmaer*・*Edam*・*Hoorn*・*Enckhuysen*。南部の島嶼部には *Briel* がある。州の街の最下位におかれるべきものではない。Geerfliet も同様で

ある。北 *Hollandia* に近接する二つの島 *Texel*・*Flielandt* は、船が停泊することで知られている。その他、*Hollandia* 伯領には *Egmont*・*Baronatus Brederodium* (*Vianen*) がある。

Traiectensis 州

Traiectensis すなわち *Vltraiectensis* 州はその首邑 *Traiecto* すなわち *Vltraiecto* (俗に *Vtrecht* もしくは *Vtert*) から名前が付けられた。都市は豊かで壮麗で、かつての *Frisii* 司教座である。また *Amersfort* がある。軽視すべからざる街である。

Gelria すなわち Geldria (*Gelderlandt*) Zutphania (*Zutphen*)

Gelria 公領は今日、二つの部分に分かたれている：その一つは *Hispania* 領で、他方は同盟の統治下にある。*Hispania* 領 *Gelria* の首邑は *Ruremunda* で、司教座および巡回裁判所所在地である。後に公の名前を付けられて *Gelre* となり、その後 *Venloo* となった。同盟領 *Gelria* は特に三つに分けられる。そのうち *Velavia* (俗に *de Veluvue*) には *Arenacum* (俗に *Arnhem*) がある。その地区の首邑であり、かつては公の居城が、いまは全州の巡回裁判所が、所在する。ついで *Hardervicum*・*Elburgum* がある。*Betavia* はもう一つの部分であり、今日の *de Betuvue* は *Batavia* の古名を保っている。そこに *Buren*・*Culenburg* 両伯領があり、二つの要害堅固な都市 *Bommel*・*Noviomagus* (俗に *Nimmegen*・*Nieumegen* とも) が属する。古代 *Gelria* の第三の部分は *Zutphaniensis* 伯領で、それ自身が州として、17州の一つをなす。名前はその首邑の *Zutphen* に由る。さらに、有名な要塞群 (*Grolle*・*Bredefort*・*Locchem*) がある。

Transisalanica (*Over-Yssel*)

Transisalanica は、その名前は *Isala* 川彼岸という立地によっている。三つの部分に分かれる：*Salandt*・*Tvunte*・*Drente*。州全体が、かつて三つの自由な市民共同体 (*Deventer*・*Campen*・*Svuolle*) であったことで喧伝され、今でもその名を誇る。さらに二つの著名な要塞 (*Steenwijck*・*Coevorden*) がある。そのうち前者は全く優れた街である。

Frisia (*west-Frieslandt*)

Frisia は「西」と添え名され、俗に *west-Frieslandt* である。首邑 *Leovardium* (*Lieuwaerden*) は卓越した大都市で、全州の巡回裁判所や *praefectus* [司法長官?] の所在地である。*Harlingen* (港で有名)・*Franiker*・*Sneek* がそれに次ぐ。

Groningensis 州 (*Groeningerlandt*)

Groninga 市はきわめて豊かで有名である。州はその名前を負っている。*Delfziel* は *Germania* に対してすこぶる要害堅固な場所である。

Belgica の学園

学園は、*Hispania* 領の *Lovanium*・*Duacum*、同盟州の *Lugdunum Batavorum*・*Franikera*、および最近創設された *Groninga* がある。

第20章 *Britannicae* 諸島

Gallia 海岸および *Rhenus* 河口に接して、多くの島がある。まとめて *Britannica* と呼ばれる。そのうち二つの大きさゆえに有名なものが *Albion*・*Ibernia* と言われる。そしてこの *Albion* は以前、海岸近くの白い石にちなん

で、*Graecia* の人間によって呼ばれた。しかし後には、優秀さの故に *Britannia* の名前だけが存続した。それ以外の者は自分の名前では自身が呼ばれただけだからである。

全ての *Europa* に隣接しているもの（それぞれに *Roma* の名声が結び付いている）のうち最大であり、その大きさ³⁾のゆえに別世界⁴⁾の名前に値することが古人によって認められた。*Graecia*・*Latin* の記録によって明らかである。今日二つの王国 *Anglia*・*Scotia* を包含する。

Anglia だけは、他の地よりも、豊かで肥沃であることによって、全てのものをより大きく肥えた形に産出することに好都合であるように育てる。気候の穏やかな点においても、海の露と月桂樹とを大量に生産するほどである。雨と雲とによって苛烈な冬の厳寒を防ぐ[*Agricola*, 12]。 *Scotia* は北により長く延びており、気候でも陽光でもより酷い。総じて不毛な岩地と荒廃した湖とのために、見るからに陰鬱である。

かつて *Britannica* 族は、粗野で無愛想で、野蛮な風習の故に残忍ないし非道であった。今では *Angli* 人は全てのなかで最も上品だと見られている。名前を、部族もしくは島から考え出したものとするのはほとんどできない。島の長さは *Tarvidium* すなわち *Orcades* 岬（いまは俗に *Dunsbii heat*）から *Dubris* 港（俗に *Dover*）まで約 150GM、最大幅は *Dubris* と *B o l e r i u m* 岬（俗に *the Landes end*）との間で 70GM である。その三角の形は、三つの角が楔とめられている。その一つは北斗を望み、広大かつ開けた海には対面に地がない[*Agricola*, 10]。もう一つは *Belgas* および *Rhenus* 河口である。第三の楔は *Hispania* にある。一辺は東方、*Germania* に張られる（古人にとってはその一部は *Norvegia* であったことを想起せよ）。他辺は *Gallia* の南に、第三の辺は *Hibernia* の西に、張られる[*Agricola*, 10]。西は *Hibernicus*、北は *Caledonius*、東は *Germanicus*、南は *Britannicus* (*Dubris*・*Bononia* 間の *Gallicum* 海峡のところ) の各大洋によって、いたるところ洗われている。

第21章 古代 *Britannia* の区分、および川・街について

島の今 *Scotia* である部分が、かつての *Caledonia* であることは、何よりも *Tacitus*⁵⁾によって明らかである。そしてその後まもなく全体は大小二つに分けられた。大の部分は今日の *Anglia* であり、小の部分が *Scotia* である。

大 *Britannia*

大 *Britannia* の人々の名前は史書の著作者たちの著作のなかで明らかである：*Ostidamnii* および *Damnonii*（今の *Cornuwall* 地方）・*Durotriges* (*Devonschire*)・*Belgae* (*Sommerset*)・*Segontiaci* (*Soutsex*・*Southampton*)・*Bibroci* (*Surrey*)・*Cantii*（その *Cantium* 地方はいま俗に *Kent*)・*Trinobantes* (*Middelsex*・*Hardforscheire*)・*Cassii* (*Cambridge*・*Essex*)・*Zocni* (*Nortfolck*・*Suffolck*)・*Ancalitae* (*Oxford*・*Buckingham*)・*Atrebatii*・*Berceria*・*Dobuni* (*Glocester*)・*Silures*（全体はいまの *VVallia* (俗に *Waelles*) に広汎に住んでいる)・*Ordovices* (*Cardigan*)・*Demetae* (*Carmarthin*)・*Cornavii* (*Cornavuan*)。さらに、*Coritani* (*Lincolnschire*)・*Parisii* (*Lincolnschire* に隣接する、*Yorckschire* の一部)・*Brigantes* (*Yorckschire* の残部および *Northumberland*)・*Meatae* (*Cumberland*)。これら全てのなかで最も知られているのは *Silures* および *Brigantes* である。前者はすこぶる好戦的で、後者は極めて数が多かった[*Agricola*, 17]。

小 *Britannia*

小 *Britannia* すなわち *Caledonia* では、かつてはほとんど全てが曖昧で、古人には知られていなかった。*Caledonia* 森と *Grampio* 山とについてはさらに何も明らかではなかった。

Britannia の川

より有名な *Britannia* の川は以下の通りである：*Tamesis* (俗に *Tames*)・*Sabrina* (*Savern*・*Humber* (短い急流ではあるが、また河口（それが湾を作り出す）が広いために、より大きな船に接近する便宜を与える))。

Britannii の古い住居

Britanni は古来、街に住まなかった。人間が無数に増えたので、建物は稠密にばらまかれた[Caesar, 5.12]。街 (Caesar が創設者なのでそう呼ばれる) は、堡壘と堀とで通過しがたい森を守ったので、それによって敵の侵入を回避するために集合することを常としていた。後に Roma の軍団がここにその植民地を導入したので、各々が少数の街の住民によってより優美に居住し始められた。ここでは Camalodunum が Roma の植民地であった。いまは Malden といい、Essexia の海浜の街である。Londinium (いま Londen) も同様に、多数の商人と集会とのためにはなほだ繁華である [Annales, 14.33]。

第22章 Britannia の住民について

Britannia の住民について Caesar は次のように考えている：「ブリタンニア人のうち内陸地方に住む部族は、彼らの口碑伝承によると、その島に土着のものであるといわれている。海岸地方に住んでいる部族は、略奪や戦いを持ち込む目的で、祖国から渡ってきたベルガエ人で、彼らはほとんどすべて、ここに来る前のもとの部族の名前でよばれている」 [Caesar, 5.12.1～2。訳書 p.163]。その後 Tacitus は言った：「ブリタンニアに初めから住んでいた人が、はたして生え抜きの人であったか、あるいはよそからやってきた人であるかは、このような蛮族にあっては、当然予想されるようにはっきりわからない。住民の体つきはさまざまである。そこからしていろいろの結論が引き出せるだろう。／ つまりカレドニアに住む人たちは、燃えるがごとき金髪と、大柄な四肢を持っているが、これは、彼らの起源がゲルマニアであることを強く主張している。シルレス族は、黒ずんだ顔をして、たいてい髪は捲毛であり、しかもその対岸にヒスパニアが位していることなどから判断すれば、その昔ヒスパニア人が海峡を渡って行き、現在のシルレス族の居住地を占領したのではないかと信じられる。またブリタンニアでガリアにいちばん接近している地方の住民たちは、やはりガリア人に似ている」 [Agricola, 11。訳書 pp.146～147]。Gallia 人は近隣のみを占居したと考えられている [Agricola, 11]。かつて王たちによって、部族ごとに分けられて、支配されていた。全ての Roma 人のなかで最初に Iulius Caesar が軍を率いて島へ侵攻し、首尾よい戦争によって住民を威圧しかつ海岸部を支配したとはいえず、後世に遺贈したのではなく、示したのであると見られる [Agricola, 13]。Claudius 帝は渡海した軍団によって部族を鎮圧した。そして Britannia の手近な部分は次第に属州の形に変えられ [Agricola, 14]、遂には Domitianus のもとの全域が Roma の支配下に入るまでになった。これまでに Caledonia すなわち Scotia が Roma 人によって鎮圧されたことを否定する人には不足しない。証拠として、大小 Britannia の境界において Scoti・Picti の侵入に抗して建造された城壁が呈示される。まことにそれに対して Dion・Zosimus の史書は Severs・Constantinus 帝の業績で反証を挙げている⁶⁾。さらに、Roma 人は Theodosius の動乱まで Britannia を支配した。まさにその時、Gallia での防衛のために Roma の軍団・守備隊を召還し、武器のない彼らを放置した。島の奥の方 (いまの Scotia である) に居住していた Scoti・Picti はこの好機に誘われて島のこちら側 (すなわち Anglia) を武力で侵した。こちらの者はその衝撃を支えることができず、Germania から Angli・Saxones を助力に呼んだ。彼らはその後まもなく歓待の信頼と法とを犯されたために、Britanni を家と領地とから追い払った。この衝撃の一部は Gallia の最奥の角という場所に、先に述べたように [第2巻第13章]、[Britannia という] 名前を持ち込んだ。山間の部分 (いまの VVallia である) は、敵の攻撃に抗して十分に守られかつ安全を与えるという立地から当然のように、そこにあつて動乱まで Britannia の諸部族の太古の言葉を守ると思われる。ここから Scotia には Scotia 語によって名づけられた彼ら自身の一連の王がいた。Anglia には Anglia 語の名前を帯びた、他とは別の彼ら自身の [王がいた]。VVallia (俗に Anglia 語では Wales、住民の言葉では Cambray) は Angli の裏切りの後、かつては長く公 [princeps] によって統治されていた。結局戦争に負けて、統治権を放棄した。次いで Anglia の王の長子が VVallia 公と呼ばれるような慣習が導入された。

第23章 Anglia について

さらに Anglia は、Tueda・Solveius 川によって Scotia から分けられる。長さは、Dorcestria に近い VVaymouth 岬から Scotia の境界にある Barvicum の街まで、80GM である。広さは、S. Davidus の街から Yarmaouth の街まで約60である。もし最も底の部分 (すなわち南辺) を測れば約70M となる。

Anglia の区分

さらに、Anglia は中世に二つの部分に分かたれた：Cambria（これは今の VVallia と同じである）・Loegria（Anglia の残りの部分）。我々の父祖の記録によるとそこには幾つかの公領があった。しかしそれらは廃されている。52の伯領（住民は *shires* と呼ぶ）は全て明瞭である。

大司教座は2。Cantuaria（俗に *Camterbury*）の街の Cantuariensis, および Eboracum（俗に *Yorke*）の街の Eboracensis である。司教座24が従属する。

Anglia の街・港・学園

都市のなかの第一は Londinium（*London*）である。首邑であり、王国全体の捷路である。市場は、Europa の最も繁華なものに伍してひけをとらない。巨大さの点、および二つの寺院の途方もない宏大さの点で、すこぶる著名な都市である。宏大さの点で、かつ住民の稠密な点でこれに次ぐのが Eboracum, ついで Bristolium（俗に *Bristouvu*）で Gallia の商品の有名な市場である（Hispania の商品の *Southampton* と同然）。その他のなかでは、Oxonium（俗に *Oxford*）・Cantabrigia（俗に *Cambridge*）は、著名な学園によって飾られ、すこぶる輝かしい大学の建物によって賞賛されている。さらにまず Londinium 周辺に、見るに値する要塞群あるいは王宮群が豊かで快適な領内に整然と配置されている。それらの名前は、*Grinvuich*・*Richmont*・*Kingston*・*Nonsuch*・*Hamptoncourt*・*Windsor*, および Cantabrigia に対する *Tebal*, である。

Britannia から大陸にわたる最短路は、Dubris から Gallia の街 Caletum（俗に *Calais*）まで、6 GM である。比較的有名なその他の港は、島の東辺では *Neucastel*・*Hull*・*Lyn*・*Yarmouth*・*Harwich*・*Clochester*・*Sandwich*, 南辺では *Plymouth*, 西辺では *Chester*（Hibernia に向かうことになる船はここから解纜する）、である。

Anglia 近辺の島

Anglia 海岸近くに位置する島々のうち比較的有名なものは以下の通りである。西では Mona（いまは *Man*）で、かつては住民にとって影響力があった。また Menavia すなわち Monapia（いま Anglia 語で *Anglesci*, VVallia 語で *Mon*）がある。南には Vectis（いま *Wight*）がある。

第24章 Scotia について

Scotia の長さは、北における南（すなわち付近の住民から *The Mule of Galloway* と呼ばれる岬で、そこから Hibernia が望まれる）から、Orcadus の島から見られる *Dunsby heat* 岬まで、520GM である。広さは、西から東へ、すなわち Mula 島付近の Novantum 岬（いま *Ardermouth head*）から Buchananum 岬（俗に *Buquhamnes*）まで、50M である。この地方は一つではあるが、住民によって二つに分割された。というのも、Grampius 山（いま *Gransbain*）は西から東に延びて中央を横切るからである。南半に居住する者は、より洗練され数も多く、事実上、Anglia の言語と慣習とを使っている。北の住民は人間の種類が粗野・粗暴・未開で、Hibernia の慣習によって生活している。都市のなかで最も有名なのは Edenburgum（俗に *Edimbrovu*）で、王国の首邑にして女王の王宮の所在地である。*Glasco*・*S. Andreas* は大司教座によって注目される。13の司教座がそれに従属させられている。著名な学園は Andrea および Aberdonium（俗に *Aberdon*・*Aberdain*）である。これほど高名な学園、および有名な港はほとんどない。

Scotia 付近の島々

Scotia 付近の島々のうち最も有名なのは、西に向かつては Hebrides で、30以上の島がある。北には Orcades（いま *The iles of Orknay*）が40以上、北に向かつてさらに遠く離れて7の Acmodae（いま *Farre*）がある。Britannia 最遠の島は Thule（いま *Islandt*）であった[Plinius, 4.16.103~104]。それについては後にする。

第25章 Hibernia について

これまでは *Britannia* 諸島のなかで最大の *Albion* について、そして *Britannia* のより小さい島々について [述べた]。大きさの点でそれに次いで、*Hibernia* (*Iverna*・*Ierna* と呼ぶ人もいる) が西に位置する。現地で生まれた名称にしたがい (今日でも住民は *Eryn* と呼ぶので)、*Anglia* 人によれば *Irlandt* である。この島・住民の固有の (そしていまなお保持している) 性質について、何世紀も前に *Pomponius Mela* が述べている: 「天 (の気候) は種子が実りをもたらずには不向きなものの、草はじゅうぶんに成長してよく茂る上に美味しいから、家畜は僅かな日照時間の合間に満腹し、食べるのを禁止しないとずっと長い間食べていて、腹が破裂するだろう。／島の習俗は無秩序で、どんな徳目についてもほかの諸族<以上に>無知で、情愛というものがまったく欠けている」 [3. 53. 訳書 p.558]。気候が優しく穏やかで快活であるために、有毒の生物は育ちもせず、許されてもいない。その長さは最大で60GMに及ぶ。一方、広さは30GMである。どの人民が最初にここに住んだかということは、*Celtici* がそうでないとすれば、ほとんど確定しがたい。他の *Britanni* は固有のものではないからである。*Ptolemaeus* [2. 2. 6および2. 2. 8であろう] がこの島に記録している *Brigantes*・*Cauci*・*Maenapii* は、疑いもなく *Gallia*・*Britannia*・*Germania* からここへ渡ったのである。いまでは四つの主要な地方に分けられている。*Langinia* (俗に *Lenquester*) は東に面し、*Anglia* 人たちにより近いだけに、より洗練されている。それと全く似ていないわけではないのが *Mononia* (俗に *Mounster*) で、*Gallia* がその南に広がる。*Connacia* (*Connacht*)・*Hultonia* (*Quunster*) はより粗野である。前者は西に、後者は北に、広がる。

伯領は王国全体にわたって33ある。*Hirbenia* 人は都市に住むと言うよりも小町に住むと言う方が適切である。王国の首邑は *Armagh* である。*Dublyn* がそれに次ぐ。要害堅固な街で、*Anglia* 王が副王の称号で派遣した代官の所在地である。*Armagh*・*Cassbyl* とともに大司教座でもある。これらに12の司教座が従属させられている。*Arglas* は港のゆえに有名である。前述の *Dublinum* は学園を維持している。それは短期間、*Britannia* 島を離れた。いまは最初の場所である *Germania* を離れて大陸内で移転を考える時である。

第3巻

第1章 古代の *Germania* について

Germania はいまや、土地の洗練さ、都市の絢爛さ、建物の壮麗さ、の点で *Italia* に比肩し、他の地方より高く評価される。そこを、古代の人たちは「土地について不体裁、山について苛酷、洗練さ・外観について陰鬱 [*Germania*, 2], 全体として森林のために荒廢、沼沢のために不気味 [*Germania*, 5], 両者のために通行不能⁷⁾」と記録したが、事態はこれほどに変わっている。

Germania 人たちの名前が何に由来するかは著述家の間でさまざまに論争となっている。それは *Gallia* 人たちによって発見され、*Germania* から *Gallia* に移住した *Germania* の主要5部族 (*Eburoni*・*Condrusi*・*Segni*・*Caeraesi*・*Paemani*) によって導入された。その後彼らは一つの同じ名前 *Tungri* で呼ばれた。それは、*Caesar*・*Tacitus*・*Dio* その他の者の書き記した記録から明らかにされる⁸⁾。その後まもなく、それは、*Gallia* 人・*Roma* 人の使用において *Rhenus* 彼岸の部族全般に変わった。この部族は、彼ら自身の不死の男 *Deus*、万物の創造者 (最古のかつ多数の部族によって *Theuth* という呼称で呼ばれた) にちなんで、彼ら自身の言葉でいつも *Teutisci* (俗に *De Teutische*) と呼ばれた。というのも、自分自身から、死すべき者のうちの最初である *Mannus* すなわち *Adamus* (地から創られた) にまで起源をたどることが命じられていたからである。これは後に、より詳しく述べる。問題となる *Germania* の境界に関しては、*Ptolemaeus* の *Geographia* を根拠として昔よりも *Germania* を広げる (最大限、2倍にされている) 者ははなはだ誤っている。私は見解を異にし、その半分より小さいと考える。今日、*Elsatia*・*Lotharingiae*・*Treviri*・*Luceburgense*・*Brabantii*・*Juliacense*、*Gelria* の半分、*Hollandia*、全 *Selandia*、*Flandria* が、侵入したと主張される。私はしていないと考え、とどまっていたと断言する。というのは、まさに *Plinius*[4.13.98]が *Germania* の境界を *Scaldis* 川まで延ばしているからである。さらに同人 [4. 17. 106] と *Tacitus*⁹⁾ とは、*Germania* 人は *Sequana* から *Rhenus* 此岸全体に住んでいると報告する。*Belgica* の一部族である *Rhemi* に関する *Caesar* の記述によれば、大概の *Belgae* は *Germania* 起源である [2. 4] ことは明白である。

確かに、*Gallia* から *Helvetii* の一部が、*Illyricum* から古い *Vindelicio*・*Noricum* (この地方は *Alpes* と *Danubium* との間に位置した) が、さらに上 *Pannonia* の一部で、古代 *Germania* の境界を越えて名前が数えられていた。

かくして、かつて *Germania* の境界であった *Vistla* 川の此岸、今日 *Polonia* の土地のうちにある境界全てに私は反対する。*Boiohaemum* についても同様である（その地方の方言が住民の素性・起源を明らかに示している）。さらに *Prussia*・*Livones* は *Germania* 語を使っているので *Germania* が侵入したとされる。古来 *Sarmatica* 族である *Venedi* が居住していたのであるから、彼らが最近侵入してきたということを私は否定する。何世紀にも亘ってそこに居続けたと私は断言する。というのも、かつて全 *Linovia*・*Prussia* と *Vistula* の右岸ほぼ全域とを占居した *Aestii* を、*Tacitus*[*Germania*, 45]はこの上なく明白な表現で *Germania* 人としている。同じ著者と *Plinius* とは、今日の *Norvagia*・*Svedia*・*Fenni* の地方および、地のうち北洋・*Moscovia* 辺境に囲まれたところは全て、*Germania* に当てている¹⁰⁾。かつては *Vistula* 源流から *Euxinum* 海・*Istri* 河口まで広がっていた *Peucini*（別名として *Bastarnae* と呼ばれる [*Germania*, 46]）さえ、同じ作者による証言によって、*Germania* 人であった。要するに、最古からの *Germania* の境界は以下の通りであった：西は *Rhenus* 川・*Germanicus* 洋、北は北洋すなわち *Hyperboreus* 洋、東は *Granvicus* 湾・*Finnicus* 湾、*Suevicum* 海すなわち *Codanus* 湾、*Vistula* 川、そしてその源流から *Sarmaticus* 山地（これは北から南へ *Danubius* の岸、いま *Hungaria* 語で *Vacia* と呼ばれる街のところ、まで延びる）に引いた線、そして南は *Danubius* 川そのもの。その後、言われるように、*Gallia* のうち *Rhenus* 左岸までの部分、*Sarmatia* のうち *Codanus* 湾と *Vistula* 右岸まで、とに侵出した。その全長は、北洋に突出する *Scritofinniae*（俗に *Noortkiin*）岬から *Danubius* 川まで400GMである。幅は最大、*Basilea* 付近の *Rhenus* 川から *Amadoca* 沼地（これは *Russia*・*Lituania*・*Pldolia* の境界に位置する）まで200GMである。

第2章 古代の *Germania* の区分、とりわけ *Vindili*・*Ingaevones* について

Germania の種族は五つ、*Plinius*[4.14.99]によって報告されている。*Vindili*・*Ingaevones*・*Istaevoles*・*Hermiones*・*Peucini*（*Bastarnae* ととも）である。

Vindili

Vindili は、*Roma* 人・*Graecia* 人の記録者によって、*Vinili*・*Vandili*・*Vandali*・*Vandalii*・*Vanduli* と呼ばれている。この民族のなかに、*Gothones*（*Gotones*・*Gutones*・*Guttones*・*Cythones*・*Gothi*・*Gotthi* ととも、著者により呼ばれる）がいる。いまは、*Vistula* の最下流部（正確にはいまは *Pomerellia* と呼ばれる。我々には生国である）に近い *Cassubiae* の一部である。*Carini*（*Pomerania* の一部）にある街は *Stolpe*・*Colberg*・*Corlin*・*Camin* である。*Lomovii*（*Pomerania* の一部）には *Stetin*・*Vsedom*・*Volgast*・*Gripesvuolda* がある。*Rugii* は昔から *Pomerania* の *Rege* 川周辺であり、*Regenvuolde* の街があり、後に島に渡って、そこも今は *Rugia*（俗に *Rugen*）と呼ばれる。*Varini*（*Meckelburgensis* 公領にある）は *Warne* の川・街の周辺である。*Anglili* ないし *Anglii*（*Meckelburgensis* 領の残りの部分）は *Lubecam* までである。*Eudoses*・*Suardones*・*Nuithones* は *Meckelburgensis* 領の一部で *Pomerania*・*Marchia* の近隣である。*Caviones* は *Marchia* の一部で *Dannebergensis* 伯領の近隣である。その隣境の *Deuringi* すなわち *Thoringi* は同じ *Marchia* にあり *Havelberg*・*Rappin* の街の付近である。*Longobardi* は *Marchiamedia*（いまは俗に *Middlemarch*）のなかにあり *Albis*・*Viadrus* 川の間、*Grabow*・*Brandenborch*・*Berlin*・*Brötzen* などの街の付近である。*Semnonnes* は *Viadrum* を流れ下る *Albis*・*Warta* 間で、*Marchia*・*Misnia*・*Lusatia*・*Silesia* にある。*Burgundiones* は、*Gotones*・*Semnonnes* の間にあって、*Cassubia*・*Polonia* の一部であった。

Ingaevones

Ingaevones の人民は次のようであった。*Chauci*（*Cauchi*・*Cauci* ととも）は、*Amisia*・*Albis* 両河口の間で *Visurgis* の両岸近くに、上流の *Brema* の街にいたるまで、さらに *Minda*（そこで *Chatti* と接する）まで、居住していた。*Tacitus*[*Germania*, 36]で *Fosi* と呼ばれている部族は、その他の著述家には *Saxones* と呼ばれている。これら全てのうち *Holsatia* は *Cimbrica* 半島までの間にいた。その後 *Albis* から *Rhenus* 河口までの全海岸を占めた。ついで *Angli* とともに *Britannia* 諸島に移った。*Cimbri* はその半島全体を維持した。今そこには、*Iuta* という名前については同じ古い部族が住んでいる。*Teutoni* は *Danica* 島に住んだ。その最大のものは俗に *Zeeland* である。*Mela* によって *Codanonia* と呼ばれている¹¹⁾。確かに *Teutoni* の一部族（方言の変化に応じて *Dani*・*Godani*・*Codani*

と呼ばれている)によってこの海全体を Mela[3.31]と Plinius[4.14.96]とは同じく Codanus 湾と言い, Tacitus [Germania, 45]は Suevicus 海(次に述べるように Suevi がその近くに住んでいた)とした。この海を越えた地方(いまは主として Norvegia・Suedia・Finnia の名のもとにある)を, 実際には半島であるにもかかわらず, Germania の巨大な島であると古代人は誤って信じていた。そのうち最大のもは Norvegia・Suedia 両王国を含むもので, それをある人々は最近隣の部族にちなんで Scandiae・Scandinavia と呼んだ。別な人々は, Danica 諸島の間にある海峡(俗の語で *Belt*)にちなんで Baltia と呼んだ。この名は後に崩れて Basilia となった。もう一つの半島(いまは俗に *Finland*)を Plinius は Finningia と呼ぶ¹²⁾。Scandia では人民は Scandii すなわち Scanii (いまは俗に *Scanen*)であり, そこから半島全体の名前となった。これと隣するのは Hilleviones (いまは *Halland*)である。両者の彼方に Sitones (いま Norvegii。俗に *Norrige*・*Nourge*)が住む。それらの地は最古の Graecia 人の著作者たちに Nerigon と呼ばれた。それを越えて Marchiofinni (俗に *Marchfennen*)がいる。Scritofinni (俗に *Scritfennen*)はそれに含まれている。岬の北に向かう最末端には Plinius¹³⁾の言う Rutubae (いま俗に *Noortkiin*)がいる。東に向かうその最近隣に Lappiones すなわち Lappii (俗に *Lappen*)が, その南に Suiones すなわち Sueones, いまの Suedi (俗に *Svueden*)がいる。その南が Gutae すなわち Guti で, 彼らの地方はいま俗に *Gutlandt* という。彼らは誤って俗に *Gothi* と呼ばれ, その地方は *Gothia* と呼ばれる。彼らと, 先[本章前節]に述べた Vistula 河口の Gothones とは同じものだからだ, と言われる。しかしこれは諸文献における古い誤りである。Gotho の起源に関する彼の Jordanes[4.25]の馬鹿げたお話である。Ptolemaeos[2.11.16]の Finni を Tacitus [Germania, 46]は Fenni と呼ぶ。彼らはこの名前を今日でも保ち, さまざまな方言で俗に *Fenne*・*Finne* と言われる。

第3章 Istaeuvones 人・Hermiones 人・Bastarnae 人・Suevia 人および古代の German 人の住居

Istaeuvones は Rhenuis に最も近かった。この民族には, Frisii・Angrivarii・Chamavi・Ansibarii・Dulgibini・Chassuarii・Marsi・Tubantes・Marsaci・Sicambri・Vbii が含まれ, 後にその領土は Vsipii・Tencteri・Juhones・Mattiaci が引き継いだ。さらに最古の時には Marcomanni・Harudes・Sedusii が含まれた。この3者はその後もなく Boiohaemo で Hermiones の間に座を占めた。これら全てのうち, 残留した Frisii・Marsaci・Bructeri については, 先の下 Germania 17州誌 [第2巻18章]においてすでに述べた。

しかし Bructeri はその後, Lappiae 川上流部と Agrippinensis 植民地の間に住み着いた。Marsi は, Drusiana 溝(これは Gelria の, Arnhemum・Dusburgium の間にある)が造られる以前に Velavia 上流と Zutphaniensis 伯領の一部(その街は *Dotechum*・*Grolle*・*Bredelfort*)とに住み着いた。そして溝が造られたので, Rhenuis の分流間に閉じ込められたその一部は, 新しい名前 Marsaci ないし Marsatii を受け入れた。その上流部では, 古代の名前で保たれていた一部は, Amisa・Luppia 川の間(街は *Dulmen*)で, ひそかに消滅した。Bructeri に近い Angrivarii は, 初め Amisia・Visurgis 間(*Minden* の街がそこにある)に居住した。Chamavi はその上流, Amisia・Loa 川(*Emda* の少し上流で Amisia と合流する)の間を占居した。のちに両部族とも Bructeri によってその領土を追い出された。Chamavi は西に, Angrivarii は北に移った。この時から Dulgibini が Paterborna の街と Visurgis との間を占めた(*Flotovu* の街はその近隣である)。*Dietmelle*・*Horn* 両街の間のここで, Quinctilius Varus は3箇軍団とともに Arminius Cheruscorum 将軍に殺された。その南隣に Chassuarii (Chattuari とも)が, Paterborna・Visurgis 間にいた(そこに *Huter* の街が設けられた)。かつての Chatti の一部である。Ansibarii は Visurgis・*Dommel* 湖間を占めた(*Diepholt* の街はそのそばである)。さまざまな Tubantum は常に Amisia 上流部に位置を占めた。Sicambri は Rhenuis の岸を Agrippinensis 植民地から Rhenuis の分岐点まで保持した。東は Lippia 源流付近の Cattos および *Medebach* の街までである。後には Tiberius によって Gallia (Mosa・Rhenuis 間)に移ることを命じられ, Gugerni と呼ばれた。そして Rhenuis 河岸の彼らの領地の一部を Vsipii すなわち Vsipetes と Tencteri とが占めた。前者は Rhenuis 分岐点のあたり, 後者は Colonia の近くである。Vbii は Germania で Rhenuis・Maenus 右岸を Colonia まで, 東の方は Chatti に隣接するまでを占めた。彼らの領地は後に, Chatti の一部である Iuhones・Mattiaci が占居した。上記の岸と Nassoviensis 伯領とは, VVetteravia と Hassia の一部とともに, そのなかにある。そこは, いまの Marpurgium であり, かつて Mattium と呼ばれた(そして部族名となったのである)。Mattiaci は VVestervaldia とともに下流部を占めた。Marcomanni は, Sedusi・Harudes とともに Boiohaemum に移住する前に, Rhenuis・Danubius・Cocharus・Nicer 川の間を領した。Sedusi は Cocharus・Nicer・Rhenuis・Moenis の間である。それに隣して Harudes は, Moenis 源流から Danubius および Ingolstadtium

の街まで引かれた線に沿っていた。Gallia の Alemanni は雑多な集団であり、Caesar Augustus のもとで Maroboduus が Marcomanni・Sedusii・Hardes を Bojohaemum に移した時、その境域のなかでも Danubius・Rhenus・Moenis の間に渡ったので、そこから名前を得た。

Hermiones

Hermiones は南に向かって Danubium の岸まで住み着いていた。ここには以下の人々がいた：Cherusci・Chatti・Hermunduri・Narisci・Marcomanni・Quadi・Osi・Gothini・Lugii・Burii・Marsigni。Cherusci の領地をいまは Brunsvvicenses・Lunaeburgenses が占める。Chatti の領地は Hassi・Thuringi が [もつ]。Hermunduri は初めは Sala・Albis・Bojohaemum の間、Voitlandia と Saxonia の Misnia の上流部に住んだ。ついで Harudes が Marcomanni・Sedusii と Bojohaemum に移ったとき Hardes の領地は後者が Danubius まで占居した。彼らは後に、より正確に Suevi と呼ばれる。Narisci は、Bojohaemum の西側面と、Moeni の源流から Ingolstadium までの線に沿った Danubius と、の間を占め、まもなく Armalauti と呼ばれた。Marcomanni・Sedusii・Harudes は、Maroboduus 将軍によって Rhenus から Bojohaemi に移された。Sedusii・Harudes の名前が曖昧になるか完全に忘れられてはいるが、Quadi は古来 Bojohaemi・Danubium・Marus 川の間に住み着いた。後に彼らの名前は Sarmatica (Hungaria の、かつて繁華であった二つの街 *Erla*・*Vacia* の間にある) まで結び付けられ、引き出されている。Osi は *Ostra*・*Osvuieczijm* (前者は Marus, 後者は Vistulae に接する) の街の間で Moravia・Silesia の一部を占めた。Gothini はそこより下流にいて、さらに Marus と Varta 川源流との間の Silesia の部分に住み着いた。ここから、大部族である Lugii は Varta・Vistula の間、Polonia の一部を、Vistula の Vladislaum の街まで加えて、保持した。その西隣の Burrii は Varta・Viadrum の間、Marsigni は Viadrum・Bojohaemum の間、両者とも上述の Semnones に境する。

Bastarnae すなわち Peucini

Bastarnae はかつて Vistula 右岸から Istri 河口まで住み、その河口の島々を保持していた。その最大のものは Peuce と呼ばれ、彼らの別名 Peuceni を表している。

Aestii が Livonia・Prussia に住み着いていたことを、上記のようにそこは五つの部族に割り当てており、私は疑っている。かつて Rhenus から Ingaevones・Bastarnas 間のこの場所で成長したからである。Hirros と、Scyros すなわち Sceros とは区別された。前者は Livonia を、後者は Prussia を保った。

Suevia

さらに Suevia は最古の時から、西は Bojohaemiici の山地、Sala・Albi・Trava の川、Codanus 湾、後にはさらに Germanicus 海、北は氷海、東は Albo 湾・Albo 湖・Botnicus 湾・Codano 海・Vistula・Marus、南は Danubius、に囲まれていた。この空間に Suevi は住み着き、先に記した諸民族に分化していた。そのなかでも最も古くかつ有名なのが Semnones である [Germania, 39]。彼らは Viadri の両岸近くに広く住んだ。この川はかつては Suevus と呼ばれ、ついで部族にその名が、さらに後に部族名によって海の名が Suevicum (いまは俗に *die Ost-zee*) となった。しかし後代、あたかも、Suevi の一部が Hermunduri という固有の名前を持つように、Suevi は独特の様子をしており、それは今なお俗に *Swaben* と呼ばれる地方で彼らの子孫が堅持している。

古い Germania 人の住居

Tacitus [Germania, 16, 訳書 p.51] は言う：「ゲルマニアの人民が、いかなる町にも住まず、お互いにくっつき合った住居すら辛抱できないことは、充分世間に知られている。彼らは泉が、あるいは平野や林が気に入ったところで、分れ分れに散らばって住みつく」

第4章 Vindelici・Noricum について

Germania は現在のように展開する以前、古代には Alpes・Danubius 間の地に広がっていた。というのも AD 300年頃、そこは Alemani・Macromanni・Quadii によって占居され初め、永続的に今日に到るまで同じ民族によって占有され、一部は Germanicus 帝国のものとされた。かくして、Rhenus 川彼岸・Brigantinus 湖・Lichus 川の間は Rhaeti、Lichus・Aenus 間は Vindelici、これと Chthii 山地（これは Vienna 付近で尽きる）との間の Danubius 河岸は Norici、と Ptolemaeos は書いた¹⁴⁾。しかしこれは誤りであった。Strabo・Plinius によってどの地方の位置も明らかである¹⁵⁾。すなわち、Rhaeti は Alpes およびその谷に、北の方 Brigantinus 湖まで住み着いた。Alpes の麓 Danubius まで、Brigantinus 湖・Aenus 間に Vindelici がいた。ここから Cethius 山地までが Norici である。これらのうち Norici は Alpes 自体を Fori Iulii 地方まで保持した。その名は Aquileia 上流に位置する街 Noreia にちなんで得た。その他の有名な街は次の通りである：Ovilia（いまは *Wels*）、Danubius 河岸の Vindoniana（訛って Vindobona、Ptolemaeos¹⁶⁾では訛って Iuliobona、いまは俗に *Wien*）、Lauriacum（いまは *Lorck*）。Vindelici の首邑は Damasia である。これは後に Augustus Caesar の指揮による植民のため、Augusta Vindelicorum と言われる。その他の極めて有名な地点は：Iuvavium すなわち Colonia Iovavia（いまは俗に *Salzburg*）、Reginum すなわち Regina castra（いまは俗に *Regensburg*。その名前は Reginus（いまは俗に *Regen*）川にちなんでかつて付けられた）。さらに Batava castra（俗に *Passau*）、そしてその街の近く、Danubius・Aenius の合流点に Bojodurum（その名前は Bojorum を承けている。彼らは、Marcomanni のために Bojohaemum から追い出されてこの地方に移動し、その子孫はいまでもそこを占めている。名前はいまは Bavari に変わっている。上代には Bojoarii また Bojuvarii といった）。その他の街は Abusena (*Abensperg*)・Guntia (*Guntzsparg*)・Campodunum (*Kempten*)・Abudiacum (*Fuessen*)・Isinisca (*Munchen*)。

第5章 Germania の川・森・山について

Germania の川のうち、より有名でしかも船を容れるものは以下の通りである。大洋に注ぐものは、Rhenus (Europa 第二の有名な川で、Brigantium 湖（俗に *der Bodensee*) を貫通し Nicer (俗に *der Necker*)・Moenus (俗に *der Meyn*) を受ける)・Luppia (俗に *die Lippe*)。そこから Amisius すなわち Amisia (俗に *die Ems*)・Visurgis (*die Weser*。その上流部は *die Werre*)。Albis (いま俗に *die Elbe*) は Sala (俗に *die Sale*) をあわせる。Codanus 湾に注ぐものは、Chalusus すなわち Trava (俗に *die Trave*)・Viadrus (昔は Suevus。Plinius [4.14.100] では Guttalus と言われる。いま俗に *die Oder*)・Vistula すなわち Vistillus (*die Weixel*)。さらに Danubius (俗に *die Donau*。Danavu と同) は Europa の全河川のうち最大で、右岸では Vindelicia から Lichus (俗に *die Lech*)・Aenus (俗に *der In*) が、左岸では Nava (俗に *die Nave*)・Marus (*die March*) が、[合流し] Euxinus 海に流れる。

Roma 人に記録された森林のうち有名なものは：Hercinia (かつて Germania のほぼ全域を覆っていた。とはいえ厳密には Bojohaemum 周辺がこのように呼ばれる。いま俗に *der Böhaymer wald*)・Bacenis (Semana と同)・Brunsvvicensis 公領では、古代の Hercinia の記憶を留めて、いま俗に *der Harz*)・Gabreta (俗に *der Dovinger wald*)・Luna (Moravia・Polonia・Hungaria の間)・Martiana (ないしは極めて直立する Hartiana。いま *der Schwartzwaldt*)・Caesia (Luppia 川右岸、Vesalia からほど遠くない)。

山のなかでは Hercinium の山稜が最も有名である。Bojohaemum はこれと Sudirum 山地とに取り囲まれている。Virturgensis 公領の Abnoba は Danubius・Nicer 両源流を取り巻く。Taunus は Maguntiacus に向き合う (俗に *der Hayrich*)。Rhaetico は Bonna (*das Siebengebirge*) と向き合う。Brunsvvicensis 公領の Meliobocus (俗に *Blockesbarch*) は Semana 森に近い。

第6章 Germania の住民について

German の諸部族の起源については、今世紀に多くの Germania 人の著作家人が多くの妄譚・虚構を述べている。第一等に古くかつ重要な著述家ローマ人の Tacitus [*Germania*, 2。訳書 pp.17~18]¹⁷⁾はこの部族について次のように記した：「彼らは古い歌謡（彼らにとってはそれは記憶と物語との唯一の様式である）で、地から生まれた Tuitonem 神と、部族の起源にして創始者である子の Mannus とを讃える」。この Mannus は Adam であり、Theut ないし Tuit はまさしく万物の創造者たる神そのものである。神は地から最初の人間を作り仕上げた。

Germania 語で *Man*, Hebraei 語で *Adam* と言われる。それゆえ全ての部族がこの *Theut* という名前にちなんでそれぞれに *Theutisci* という名前(すなわちさまざまな方言で, *Tuit*・*Tuitisci* により, 俗に *die Teutische*・*Durtcche*) を採った。最古の時に, Hispania・Gallia・Briannica 諸島・Germania・Illyricum 全体を通して, それらの民族がすべて一括して Graecia 人によって *Celtae* と呼ばれていたことは, さきに Gallia 誌で述べた [第2巻第13章]。Caesar は『ガリア戦記』[6. 18. 訳書 p.219] において「ガリア人は, 自分らはすべて, 父なる神デイスの子孫であると吹聴」していることを断言する。それが Germani の *Tuitonem* と同一であることを彼らが理解していたことはほぼ間違いない。Lucanus が彼らの神を *Teutatem* と記録している¹⁸⁾からである。Hispania 人が *Teutatem* と *Mercurius* とを同一視して祀ることは Livius が書いている¹⁹⁾。前記の5民族すべてが *Teutiscos* (*die Teutische*) という単一の語を使うものであったことが, この根拠により, またそれに関する *Celtica* の言葉により, 結論づけられる。Babylon 市からの部族の拡散に際して Noach の曾孫 *Aschenaze* が自己の部族を連れ出したことは別な箇所でも説明する。ここから, 後に Germania の部族は Hebraei によって常に *Askenazim* と呼ばれる。さらに, 最古の時に少ながらざる民族が Germania を出て Gallia に移住したこと, Gallia 人が Germania に移動したこと, を Roma 人たち, 特に Caesar²⁰⁾・Tacitus [*Germania*, 2・28など] が述べている。Helvetii は Danubius・Rhenus・Moenus・Bojohaemum の間に位置を占めた。Bojohaemum 自体は Boji で, そこから地方名が [生まれた]。後世, Germania 人のさまざまな民族(Gothi・Burgundi・Rugii・Vandali・Longobardi・Marcomanni・Quadi) が, あるものは Italia に, あるものは Germania に, あるものは Hispania に出立した。かつて Venedi すなわち Vinidi 族は Vistula 彼岸で Slavi と隣接し, Albis にいたるまでの Germania の大部分を占めた。ここから, Silesia・Lusatia・Misnia・Brandenburgensis 候領・Meckelburgensis 公領・Pomerania・Slavonica において, 多くの街・城砦・村の名前が [生まれた]。部族自体は全 Bojohaemum, Moravia, Lusatia 領の大部分, にいまなお住んでいる。

第7章 Germania のいかなる部分が Roma 帝国に従属していたか

今世紀に話を進める前に, かつて Germania のいかなる部分が Roma の武力によって征服されたのか, をまず示すことにはその甲斐がある。Germania 人のうち最初に, 自分たちの名前を武力のゆえに知るべきものとして Roma 人に示したのは, 先に Gallia・Italia に進んだ Cimbri・Teutoni である。彼らを, Gaius Marius は一部は Gallia で, 一部は Italia でまさに Alpis の麓で, 打破した。この後 Caesar は, 服従した Gallia が Rhenus を渡って Germanus を挑発した時に, Germania 諸族との永続的な戦争を扇動した。残りの全ては, どこへでも軍を送り込んだので, 簡単にそれに降った。しばしば, 大軍をもって Gramani に勝つというよりも凱旋したということ を Roma 人の作家たち自身が漏らしている。

このうちのいかほどの部分が, これほど多くの世代において, 軍によって Germania に向かうことによって鎮圧されたか? 実際 Roma 人自体が最大限に損害を受けることで, Rhenus・Albis 間の人民は Augustus・Tiberius の指揮権のもとで征服された。その先はその支配の下には何も保持しなかった。また Rhenus に近い, Frisii・Vsiptii・Tencteri・Iuhones・Mattiaci, およびそれに隣する Alemanni (上述 [第3巻第3章?]) のように, 彼らは起源において Germani ではなく Galli だったのであるが) をも [保持しなかった]。しかし, そのすぐ後, AD200年頃, 彼らは反逆した。繰り返し侵略することで Gallia を荒廃させた。またこの騒乱によって Franci の名前も生まれた。

Rhenus・Albis 間に住む全ての人民が自分たちのために, 自主的な議論によって, 即座に Gallia を繰り返し侵略して略奪する, 一つの新たな団体を構成したからである。Albis・Danubius の彼方の残余の Germania は常に無傷のままであった。まもなく, 上述のように Suevi・Gothi・Burgundi・Vandali・Longobardi その他の民族によって追い出され, Roma 帝国を越えて進み, 事実上全てを占居した。Danubius に隣する Marcomanni・Quadi は Marcus Antoninus 帝以来, そこから Vindelicia・Noricum・Pannonia を Roma 属州に目指し始めた。Marta 以前この Germania 族は, さまざまな属州にわたって Roma 帝国全体が占居されるまで, 静止しなかった。かくして遂には, 帝国の名前と名声とをその末端まで引っ張っていった。

第8章 Germania の諸王国, およびその最新の区分, について

Germania 人たちはかつて, 自由な共和国として Rhenus・Danubius・Vistula・Codanus 湾の間に暮らした。

とは言え、ほとんどが自分たち自身の元首をもっていた。彼らを Roma 人はしばしば王という誤った名前と呼んだ。Codanus 湾の彼方に二つの巨大な王国が存在した。Norvagia の Sitonum と Suedia の Sueonum とである。Norvagia の支配権が Danus に移されたということを除けば、両者は今なお存続している。Danus にはその後 Bojohaemum の Czechii と Vistula 川近くの Poloni とが加わった。そして Saxones・Duringi・Franci・Orientalium・Suevi (Danubium 源流近くにいた)・Bojoarii の王国はほぼ同じ騒乱によって生まれ、およそ Carolus Magnus の時代に廃絶された。彼は結局、Germania における Roma の支配権を授けられ、それをさまざまな属州・公領に分けた。すでにこの時、Norvagia, Suedia, Dania の一部、海の彼方の Suevicum, Vistula 此岸の Polonia, が Germania から奪われた。この後 Germania は二つの部分、すなわち上・下に分かれた。上には次の地方がある：Helvetia・Alsatia・Suevia・VVittenbergensis 公領・Bavaria・Franconia (Francia Orientalis)・Rhenus 宮中伯領・Bojohaemum・Moravia・Austria・Stiria・Carinthia・Carniola・Tirolis。下には、17州 (いま俗語で Belgium と呼ばれる) を除いて：Leodicensis 公領・Coloniensis 大司教領・Treverensis 大司教領・Moguntiacensis 大司教領・Clivia・VWestfalia・Hassia・Durlingia・Saxonia・Misnia・Lusatia・Silesia・Brandenburgensis 候領・Pomerania・Meckelburgensis 公領・Holsatia。Helvetii は、900年頃より後は Germania に、そして最近では Germania 帝国のもとに算入されたが、結局帝国の軛から解き放たれ、約220年間、自由にふるまってきた。さらに、Otho 3世が統治した時、(俗説のように) Germania の元首たちの間で会議され決議されて、Germania の名前の元首でない者は Roma 皇帝に選出されないことになり、さらに、七人委員会が設置され、皇帝を選ぶ権限のゆえに彼らには Elector の名前が与えられた。このうち3人の聖職者は大司教にして神聖帝国の大書記官長であり、第一は Germania の Moguntiacus, 第二は Italia の Coloniensis, 第三は Gallia の Treverensis である。その他の4人は俗人である。第一は Bojohemia 王にして献酌侍従長、第二は Rhenus 宮中伯にして大膳職長官、第三は Saxo にして侍従武官長、第四は Brandenburgensis 辺境伯にして式部長官、である²¹⁾。

文献

立岡裕士 (2021a) Cluverius の *Introductionis in universam geographiam, tam veterem quam novam* : 第1巻および第2巻1～7章の翻訳。鳴門教育大学研究紀要36, 209～231

立岡裕士 (2021b) Cluverius の *Introductionis in universam geographiam, tam veterem quam novam* : 第6巻第11章～第16章の翻訳。徳島地理学会論文集16, 155～160

注

- 1) Gebunna 山は Caesar(1.1)にはなく7.8で言及されている。
- 2) 「邦」と訳した単語は原文では resp.および reip.である。respublica とその複数形の略号と考える。
- 3) *Agricola*(10)では、Britannia を、Roma 人が知る限りで世界最大の島である、とする。
- 4) 「別世界」[alterum orbem terrarum]という表現は Plinius(4.13.96)にあるが、それは Scantinauia のことである。
- 5) *Agricola* では、10章に Caledonia の名があり、27章以下で未征服の奥地であることが記されている。
- 6) Dio(77.13.3~4)には Severs が Britannia 全域を席卷したように記されている。
- 7) *Germania*(2)では「苛酷」なのは山でなくて気候である。また「通行不能」[inviam]という記述は *Germania* には見当たらない。一方、Mela(3.29)には「地自体は、多くの川のために阻まれ、多くの山のために苛酷であり、大部分が森林と沼沢とのために通行不能である」とある。
- 8) *Tungri* に関する記事は *Germania* 第2章にある。しかし Caesar と Dio との中には見出しえなかった。
- 9) *Germania*(28)には Germania 人が Rhenus 此岸に住んでいることが記されているが、Sequana 川は明示されていない。
- 10) Suedia に該当する Suiones については *Germania*(44)に記述がある。一方、Fenniについては同書46で Germania 人とするを断じかねている。Plinius(4.13.96)は Germania に関する記述のなかで Scandiae 諸島に触れているが、Cluverius の記述ほど明確に海域を把えてはいない。
- 11) Mela には見出しえなかった。

- 12) Plinius(4.13.96, 4.16.104)では Scandiae には言及しているが Finningia は記されていない。
- 13) Plinius には Rutubae に関する記述は見出しえなかった。
- 14) プトレマイオス (2.12~2.13) にこの3部族の位置に関する記述がある。ただしこの記載よりも詳しい。
- 15) Plinius(3.20.133)では Alpes 山中の住民として Norici・Raeti・Vindelici が挙げられているが、所在地(分布)についてそれ以上の記述はない。
- 16) 訳書では2.14.3にウィーンが挙げられているが、校訂が加えられた都市名は「ウインドボナ」となっている。
- 17) この引用に関しては、Cluverius の引用文と訳書 (pp.17~18) が採った校訂文とに若干の違いがあるため、訳書の文章を利用しなかった。また引用文中の括弧は Cluverius のものである。
- 18) Pharsalia (1.445。訳書では1.458) に Tentates がある。
- 19) Livius 中に見出しえなかった。
- 20) 周知のように、Gallia 人と Germania 人との相互の膨張・侵入を調停することが Caesar の Gallia 戦争の口実の一つであり、したがってこの問題は『ガリア戦記』巻頭から何度も記述されている。枚挙に遑ないので具体的には注記しない。
- 21) これらの選帝侯の官職の訳語は Wikipedia「選帝侯」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%81%B8%E5%B8%9D%E4%BE%AF>) に拠った。

【付記】

例言③に記したように、Cluverius の本書の位置付けについては別稿を準備中であるがまだ稿を成すに至っていない。しかるに本紀要を編集する学術研究推進委員会は、(昨年)の立岡(2021a)の投稿後ではなく、本稿投稿後に)唐突に「研究上の意義・目的及び検討・考察」を記載することを求めてきた。致し方ないので下記の文章を添える。もとより覚え書きに過ぎないので、先行研究に対する言及は意図的に避けた。非礼に対する許しを乞いたい。

Cluverius の本書は以下の3点から注目に値する。

(1) cosmographia と geographia

地中海世界ではヘレニズム期に地理学が創出されたとされる。しかしストラボンやプトレマイオスの被引用が多いとしても、地理学を主題とする図書が兩三部しか伝存していないことからすれば地理学自体がギリシア語圏においても必ずしも広く受容されたのではないように見える(もとより、プールのタルコスのテーセウス伝冒頭で(何の注釈もなく) γεωγραφία が擲擧されていることからすればある程度は一般的に受容されていたとは言えよう)。ラテン語圏ではさらに普及していなかったように思われる(ギリシア文芸導入の最初期というべき Cicero は γεωγραφική とそれを直訳した geographia とを混用している(Atticus 宛書簡2.4.2.6など)が、とにかく地理書を書こうとしていた。しかしそれは完成しなかったようであり、またこれもふくめて地理学を主題とした図書は(書名のみであっても)伝来していない)。一方、Cassiodorus(6C)の *Institution* (1.25) はプトレマイオスを cosmographos として言及した。それとは全く別の文脈で Isidorus(6C~7C)の *Etymologiae* (6.2.1) も cosmographia という語を用いている。したがって *Institution* や *Etymologiae* がヨーロッパに将来され広範に読まれた限り、cosmographia はヨーロッパに伝来したと言える(もとよりその内包は不同であろう)。実際、cosmographia を冠する作品がヨーロッパで幾つか作られている。

ヨーロッパに地理学が伝来したのは15Cである。しかし初めに(1410年刊)プトレマイオスをラテン訳した Jacopo は、ヨーロッパに cosmographia があることを踏まえて、訳書名を *Cosmographia* とした(*Geographia* の書名で刊行されたのは1490年である)。これを受けて、たとえば Apianus は cosmographia を冠する図書で cosmographia・geographia・chorographia の異同を論じている(*Cosmographicus liber*, 1524年など)。この状態が変わるのは17Cのことであろう。たとえば Varenius の *Geographia generalis* (1650年)ではすでに cosmographia が言及されていない。書名に geographia を用いているものの cosmographia に言及する Cluverius は地理学導入期の最後の世代と言える。

(2) 地理学の二元的構成と *geographia generalis*

近代地理学の系統地理・地誌という二元的構成は（ギリシア地理学に淵源しつつ）直接には Varenius に負っている、という認識は19Cに広く受容されていたようである。この認識は二重に誤っている。ギリシア地理学に関しては、たとえばプトレマイオスは *γεωγραφία* と *χωρογραφία* との違いを論じたのであって *γεωγραφία* の下位部門について論じているわけではない。すなわち地理学の二元的構成は近代地理学の現象であり、ギリシア地理学に存在するものではなく、したがってそれをギリシアに淵源すると考えるのは遡及史観による時代錯誤に過ぎない。他方、*geographia generalis/geographia specialis* という区別・対比は Varenius に直接先行する17C 初頭の論者 (Kechermann その他) に遡ることが明らかにされている。その一方で、Varenius の *Geographia generalis* (の書名) が Münster の *Cosmographia generalis* (1544年) に負っているのではないかという指摘もつとになされている。しかし *generalis* には、日本語ならば「全般」「一般」と訳し分けうる二つの意味がある。いずれも *specialis* と対比することは可能であろうが、その対比は「全般」よりも「一般」の意味合いにおいてより必要なのではなからうか。そうであれば、*generalis* が単行する地理学は、(単なる総論・概論の意味における地理学であって) こうした二元的構成を想定していない地理学であると思われる。本書の題名に用いられているのは *universus* であって *generalis* ではない。しかし Varenius は *generalis/specialis* を *universa/particularis* と換言している。また、もし *universus* と *generalis* とを同一視することが不適切だとしても、少なくとも本書は二元的構成にはない地理学 (の一つ) である。

(3) 17C ヨーロッパの *geographia*

Cluverius の本書は、彼が *geographia* をどのように理解していたかを示す資料であるに留まらない。本書は広く読まれたと言われる。それを裏付ける資料を筆者は知らないが、著者の死後であるにもかかわらず本書が17Cを通して増補されつつ版を重ねていることからすれば、それなりに広く受容されたことは確かであろう。したがって、本書を通して *geographia* を理解 (ないしは観念) した人が少なくないはずであり、その限りで17C ヨーロッパで理解されていた *geographia* を理解する資料となる (もとより同時期に刊行され受容された他の著作との比較が必要ではあるが)。

**Cluverius's *Introductionis in universam geographiam,*
tam veterem quam novam:
an translation of volume 2 ch.8 to vomule 3 ch.8**

TATUOKA Yuuzi

Cluverius was a german geographer in the early 17th Century. His book was written in Latin. This writer translated a part of it into Japanese. The titles and the outline of the contents of each chapter are follows:

vol. 2

- ch. 8 On Gallia
Division of Gallia.
- ch. 9 On Gallia Braccata, a.k.a. Narbonensis Provincia
Outline of Gallia Braccata, its inhabitants and famous towns.
- ch. 10 On Gallia Comata, and its main part Aquitania
Division of Gallia Comata, famous inhabitants and towns in Aquitania.
- ch. 11 On Gallia Celtica, or Lugdunensis
Famous towns in Lugdunensis.
- ch. 12 On Gallia Belgica, and the rivers in whole Gallia Transalpina
Famous inhabitants and towns in Belgica, main rivers in whole Gallia Transalpina.
- ch. 13 On inhabitants in Gallia, and its division in later years
People and their kingdoms in Gallia since Roman conquest.
- ch. 14 On later Gallia, and its divisioning into various provinces
Division of Gallia in Cluverius' days.
- ch. 15 On the famous Gallian towns, and lustrous academies
Famous Gallian towns and academies.
- ch. 16 On Sabaudia and Comitatus Burgundiae
Division of Burgundia
- ch. 17 On Helvetii and Valesii
Outline of Helvetia.
- ch. 18 On Belgica of nowadays, or on the lower Germania today
Outline of Belgica, and its independence.
- ch. 19 On the peculiar towns in the lower Germania
Famous towns and academies.
- ch. 20 On the Britannia islands
Outline of the Britannia islands.
- ch. 21 The division of old Britannia, and its rivers and towns
Outline of the Britannia, and its main rivers and towns.
- ch. 22 On the inhabitants in Britannia
Character of the inhabitants in Britannia, and Roman conquest.
- ch. 23 On Anglia
Division of Anglia, and its famous towns, ports, and academies.
- ch. 24 On Scotia
Outline of Scotia.
- ch. 25 On Hibernia

Outline of Hibernia.

vol. 3

ch. 1 On old Germania

Extent of Germania.

ch. 2 The division of old Germania, and especially on the Vindili and the Ingaevones

On the 5 races of Germania, people in northern Germania.

ch. 3 On the Istaevones, the Hermiones, the Bastarnae, the Suevia, and the habitation of old German

People in middle Germania.

ch. 4 On the Vindelicia and the Noricum

People in southern Germania.

ch. 5 On the rivers, forests, and mountains in Germania

Famous rivers, forests and mountains in Germania

ch. 6 On the inhabitants in Germania

Origin and movement of Germanic people

ch. 7 What parts of Germania was subject to the Roman Empire

Germania under Roman Empire.

ch. 8 On the various kingdoms in Germania, and its latest division

Division of Germania in Cluverius' days